
異世界に来てしまった訳だが

雨宮豆腐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界に来てしまった訳だが

【Nコード】

N2583Q

【作者名】

雨宮豆腐

【あらすじ】

異世界に来てしまった山田太郎さんが奮闘？ するお話。

異世界に来てしまった山田太郎が弱いながらも成長し、仲間と出会い少しずつ、本当に些細な程少しずつ変わっていくのかなあ？ 汗そんな陳腐なお話。

主人公は最強じゃありません。むしろ最弱です。少しずつ少しずつ強くなる？

女性が突然一目惚れ（主人公は絶世の美男子ではない、むしろ不細工）急に主人公を好きになる。そんな事はありません。勘違いはあ

りますが……。むしろ主人公を嫌いになる女性、男性も周りには沢山出てきます。

最初から絶大な誰も敵わない力があつたら人間どこかしらで歪んで行くのでは？ 根本的に人間は自分自身が可愛い、自分自身を犠牲の秤にかけない人間はいない、と思い書いた処女作品です。（注意）多分この作品を書いている作者は歪んでいると思います（汗）

このページを開いて下さった方、読んで下さる、下さった方申し訳ありません。

公開するつもりで書いていた訳ではなく、ある程度書き進めてから手直しをして公開するつもりでした。初めて小説家になろうに登録してイマイチよく使い方がよくわからない状況で公開になってしまった次第です（汗）

文がおかしいぞ。拙い文だな。誤字脱字フイーバーだぞゴラァァ。もう作者アホか。作者は俺を怒らせた。等々、様々な思いになるでしょうがそれでも良いとお思いいなって下さる方はお付き合いして頂けたら嬉しいです。

追伸、投稿した文の編集の仕方把握しました（一ω☆）キラリ

チュートリアル

携帯の明かりを頼りに道を進む。

薄暗く、狭い人が二人並んで歩ける程の石造りの通路を歩いている。

通路は湿気でジメツとしていているが苔やゴミ一つなく、綺麗に掃除してあるような印象を受ける。

ただ、ジメツとした空気に混ざり、腐敗臭が漂う。

「あ……」

ふと、携帯の画面を見るとバッテリーの残量は二つ。何処まで携帯のバッテリーが持つか定かではないがこれは不味い気がする。

今、俺——山田太郎は自分が何処にいるのか見当がつかない。

間違いなく自分は自宅からコンビニに向かう途中の道を歩いていた。目指すは自宅から徒歩五分程にあるコンビニ。丁度、そのコンビニに向かう道にある交差点に差し掛かったら次の瞬間、見たこともない場所にいた。

つまりこの場所である。白昼夢かと思ったが確認の為に腕をつねると確かな痛み。

とりあえず夢ではないようだが、薄暗い為、携帯のライトを頼りにこの場所から抜け出そうとしていたが一向に出口が見当たらない。もしかしたら自分はここから出られないのでは？

それに携帯は圏外。

ひしひしと危機感だけが募っていく。

それにこの臭い。酷すぎる。全く一体どんな事をしたらこんな臭いがするのか検討もつかない。

「誰かー！ 居ませんかー！？」

声が木霊し通路を伝って反響する。

その後にしーん、という静寂が辺りを包む。

ダメか。

多分、人は居ない。人の気配が全くしないからだ。

しばらく、歩いていると前方に淡い光が見える。

出口か？

小走りに通路を走り抜けると狭い通路から開けた場所にたどり着いた。

「おわーすげえ……」

幻想的だった。それにこの場所からは腐敗臭が全くしない。どこか神聖な空気を醸し出している。

開けた場所の壁には淡い光を放つ握り拳一つ程の大きさの石が無数に埋め込まれている。まるでイルミネーションようだ。

その場所の中央部分には漫画などで良く見る魔法陣のような物が地面

に描かれていて、その魔法陣を四角で囲むように太い石柱が立てられている。

この明るさなら大丈夫だな。

俺は携帯のライトを消すとポケットにしまい、魔法陣に近づいて行く。

「これ入っても大丈夫か？」

等と言いながらもゲームなどの仮想現実が好きで、非日常に憧れている俺の好奇心は止まらなかった。

立ち幅跳びのように両足で地面を蹴ると魔法陣目掛けてジャンプ。

「……だよねえ」

丁度、魔法陣の中心部分に着地。

辺りをキョロキョロと見回し足元も確認するが変化無し。

やっぱり何にか起きる訳ないよね……。

【プレイヤーを認識。プレイヤー名 不明】

「えっ!？」

突如、頭に直接響く様な機械的な声が聞こえて、俺の心臓の脈がどくん、と跳ね上がる。

【出身、不明。職業、不明】

あれ？　これってまさか夢にまで見た異世界召喚って奴ですか！？
待ってました！！

【戦闘ランク、不明。スキル、不明。称号、不明】

俺の中で妄想が膨れ上がる。

これはまさか俺が規格外能力チートを得てとか！？

俺は興奮していた。異世界に迷い込むとか夢のようだ。そんな気はしてたんだ。んでハーレム作って……。

くつくつと俺は笑う。

さあ！！　これからどうなる！？

【チュートリアル終了。診断結果、どの結果も不明で最弱と判断。不適合としてプレイヤー不明をガガの村に追放します】

あ？　最弱？　不適合？

というか……

「おい？　追放って、なんだそれ？」

俺は目映い光に包まれて思わず目を瞑った。

裏チュートリアル（前）（前書き）

すいません、文才ないです

裏チュートリアル(前)

「……あら？」

どうやら光は収まったようだ。目を開けると、あの幻想的な場所ではなく目の前に広がるのはだだっ広い緑の草原。少し先の方にポツンと家が二軒経っていてその周囲を木で造った柵で覆っている様な場所が見える。

とぼとぼ、そこまで歩いて行くと日本語で木で造られた門の様な物にカガの村と書かれていて村だと把握する。

追放されたんだよな、俺。

俺は右手の人差し指でこめかみをポリポリと掻くととりあえず村の門を潜る。

すると左手の辺りからピコっという電子音が聞こえて視線を音の方へ向ける。

「……うわ、なにこれ？」

左手首辺りにタッチパネル式の掌サイズの機械が埋め込まれていて非常にショックを受けた。

画面を覗き込んで見ると『NEW』という文字が写し出されている。

画面に触れると頭に再び、あの時間こえた声が頭に響く。

【音声で名前入力して下さい】

少し悩む。

「山田太郎」

でも名前を言わない理由もないので指示に従う。自分の名前を機械に向けて言うと言画面に『ユーザー名入力完了、ヤマダタロウ。デバイス起動』と文字が表示されると不意に人の気配を感じて画面から視線を外す。

「や、ヤマダタロウって……ぷぷ、ダセェ名前」

どこから現れたのだろうか。俺の目の前には真っ白なワンピースを着た腰まである長い白髪の少女が翡翠色の目に涙を浮かべながら俺を指差し、口元を押さえながら笑いを吹き出していた。

歳は10歳位だろうか。

俺は自分の名前が嫌いだ。在り来たり過ぎる山田と名字に太郎という名前のせいでどれ程、馬鹿にされたか。

可愛いが人の名前を馬鹿にするなんてムカつく少女だ！

「あー？ ムカつく少女？ 可愛いのは分かってるがよ……少女は頂けねえな」

先程の可愛い笑顔は何処にいったのか。少女は俺に射抜くように睨みつけてきた。

「え？」

何この少女！？ 読心術！？ てか怖いっす。

「いでででで!!」

突如、左手首に鋭い痛みが走る。

手首を押さえながら少女を見つめる。

手首痛い。助けて。

「はあ……情けねえな。おい、ヤマダ。今回はこれぐらいで許してやるが次はもつと痛いのにするぜ」

少女は呆れたようにため息を一つ落とすと右手の人差し指と親指でパチン、と音を鳴らす。

すると先程までの鋭い痛みが嘘の様に引いていった。

「……」と俺。

無言で少女を見つめながら手首を擦る。

「君誰？　ていうか俺の手首に何したの？　なんで俺の名前知ってるのよ？」

「あー、自己紹介がまだだったわ。私、あんたの左手首に付いてるデバイスな。それと手首にはムカついたから電気流した。」

それにあんたに念話して声流すのこれから私だからあんたの考えてる事は全部聞こえっから気をつけな」

「マジスカ……」

俺は左手のデバイスと自らをデバイスと呼ぶ少女を交互に見る。

擬人化キタコレ。萌え要素だわ。でも口が悪い幼女、怖い。

「だから聞こえるつつてんだろうが!!」

こめかみに青筋を立てながら少女が罵声を浴びせけると同時に今までに感じた事のない鋭い痛みが全身に走る。

「がああああああっ!?!」

余りの痛さに立っている事が出来ず、地面に倒れ込み、のたうち回る。

「なっ? だから分かったか」

「あああああああ!!」

とてもじゃないが少女言葉をまともに聞いていられるような状態じゃない。

身体が焼けるように熱いし手足の感覚も無くなってきた。それに自然と涙が溢れてきて止まらない。

「あああああああ!!」

「ったく、うるせえな。男の癖に女みたいに喚きやがって……ほら止めてやるよ」

パチン、と少女が指を鳴らして俺に走る痛みは一瞬で消えた。

「……はぁ……はぁ……はぁ」

息がしにくい。脈拍が激しい。まるで自分の心臓の音をスピーカーで聞いているのではないかと思う程、どくんどくと高鳴っている。

「よし、聞きたい事あるから正直に答えろよ。答えなかったら……分かるな？」

少女の言葉の意味を悟り、地面に横になりながら勢い良く頷く。さっきみたいな痛みが身体に走るなんて御免だ。

「素直でよろしい。ここはお前の住んでいた世界とは違う世界なんだがお前は何処、出身だ？」

「地球、日本……？ で合ってる」

俺は震える声で少女の質問に答える息を整えながら起き上がると「ああ、日本ね」と言いながら少女は俺に近寄ってきて左手首にあるデバイスを指差す。

「ここに向かって喋れ。今登録し直してるから」

登録し直してと言うのがよく分からないが、こくり、と頷いて少女の指示に従う。

「日本……。あのすいません。日本知ってるんですか？」

また怒らせたら堪ったもんじゃないと敬語で喋る俺に少女は目をきよんとさせて、ケラケラと笑う。

「知ってるがそう怖がんなよ。別に敬語じゃなくていいぜ。ただ幼女とか小さいとかは言うな、その呼び方は気に入らない。分かったな」

敬語で喋らなくていいって言われてもなあ。怖いし、でも敬語で話さなくていいって言われたのにまた敬語で話したらあの痛いのがあれば、そう思って少女のお言葉に従う。

俺がそう考えてる間も少女は笑っている。
そう言えばこっちの考えは筒抜けなんだっけ。

「日本……。質問、何で日本を知ってるの？」

少し考えていたのか、間を置いて少女は口を開く。

「お前以外にも日本から来た奴を何人か知ってる。名前だけだがな」

へえ、俺以外にも日本からこの世界に來た奴がいるんだな。

「で、次の質問だが――」

「ちょっとタンマ」

「なんだ？」

少女は言葉を遮られ顔を少し歪ませる。不機嫌にさせてしまった。怯えながらも俺は続ける。一応、大事な事だ。

「ひっ……あの、君の、名前は？」

「教える気はない。好きに呼べ。ただ分かるよな」

即答。

俺は全力で頷いて少女の名前を考える。自身をデバイスと言っていた。ちょうどいい、デバイスの名を活用して名前を考えよう。

デバ……違う。イス……これも違うな。バス……車だな。デス……死……ぴったりだな、怖いし。

「デスって……まあそれでいいが。ヤマダ、お前センスねえな」

「う、すみません」

少女——デスは謝る俺を見て呆れたようにため息を一つ落とした。

裏チュートリアル（前）（後書き）

一応、書き続けます。非公開の仕方もあるから……拙い文ですがお付き合いしていただけたら幸いです。

裏チュートリアル(中) (前書き)

拙い文章ですが申し訳ないです> (| ;) <
お気に入り1件感動しました(ゝ ; ω ; 丶) ブワ
ありがとうございます(*ゝ▽ゝ*)

裏チュートリアル（中）

あれからデスにこの世界——ターブルについての説明を受けた。その説明を受けていく中で俺のデスへの恐怖心は徐々に薄れていった。

言っではいけないワードさえ言わなければ口は悪いが基本的に良い娘だ。

俺が最初に通ってきた石造りの通路はターブルと違う世界を繋ぐゲートと言う場所だと言う。

本来ならあの場で俺は自分の能力等を調べられターブルに送られるが、ゲートに何らかの不具合があり、俺の事が調べられずこのガガの村というゲートとターブルの中間に存在する誰も居ない場所に送られたようだ。ちなみに違う世界——つまりターブル人じゃない俺を含む人達をプレーヤーと呼び、ターブル人をノンプレーヤーと分けていると言う事を教えられた。

「誰が俺をここに送ったの？」

聞いてみると、

「ターブルの神様とお前の世界の神」

さも当たり前のようにデスが言う。

へえ、そうなんだ。てか、なんで俺の世界の神様は俺をここに送ったんだろ？ いや異世界は嬉しいんだけど。

そう考えているといたらデスが考えを読み取ったのか「少し待って調べてやる」と言うから俺は黙って、ぼう、とデスの事を見つめていた。何やら目を瞑り右手を眉間に当ててうーん、と唸っている。

しばらく見ていると突然「あっ!？」

とデスが驚いた様子で声を漏らす。

「分かったの？」

俺は興味津々だ。

「あー、ヤマダ同情するよ」

ばつの悪そうにデスは顔をしかめる。

え？　なんでそんな顔をしてるの？

「デバイスの項目の称号を見てみる」

そう言うのでデバイスに触れると何やら項目が出てきた。

ステータス。

アイテム。

装備。

称号。

この四項目である。

迷わず俺は称号に人差し指を当てる。すると画面が変わり何やら文

字が。

「【生まれた世界から見捨てられし者】 って……まさかさ……いやいや、これって……」

「ヤマダんとこの神がお前を捨てたんだわ。ドンマイ」俺が言おうとしていた事をデスが続ける。

嘘、俺じゃない子なの？

「そう言う事ならゲートの不具合じゃないな。お前の能力とか全て不明だと言うのは」

「え？ なんで？」

「それはな——」

俺は耳を疑った。いや、マジスカ。

本来なら異世界に送られる際に神から加護が貰えられて力やらが強くなる物だと言うが俺を捨てた神が加護をくれなかったらしい。

ゲートは加護を感じとりその者の能力を把握すると言う。

つまり、加護のない俺はゲートで認識されないし、俺弱いまま。規

格外になれず……んじゃどうやって生きていけって言うのよ。

デスから聞いたが魔獣やらが居たり魔法やらがある世界で俺生きてけないじゃん。

——いや待てよ。

俺の瞳が妖しく光る。

「こっち（ターブル）の神様は加護くれないかね？」

デスは首を横に振る。

「無理だな。基本的に神はお前を含む異世界には干渉しない。するとすれば神に害を成す事をした場合だ。それ以外なら何をしてても問題は……ん？　ちよっと待て」

デスは右耳に右手を当てるとうんうん、と頷いて「了解」と元気な声で言う。

「ターブル神が可哀想だから加護くれるって良かったな」

マジで！？　神様愛してる！！　これで俺も念願の規格外になれるぞ！！

「喜んでいる所申し訳ねえが……規格外になんかなんねえよ」

え！？　嘘！？

「称号のスキルで魔力が扱えるようになるだけだ」

称号のスキルって何？

俺の心を読んだデスが説明を続ける。称号にはスキルが付いている

物とそうでない物があり、今回テーブル神がくれた称号にスキルが含まれていると教えてくれた。

俺は称号の項目を再び選ぶともう一つ増えた称号を見つめる。

【テーブル神の同情】と言う項目が増えていた。

それに触れるとスキルと書かれた文字が浮かび上がる。

パッシブ…魔力（F）

「なるほど、パッシブってつまり、持ってるだけで効果が出ると言うわけか」

まあ、間違いじゃなければだけど。

「おう正解だ。あとアクティブってのもあるが説明はいるか？」

どうやら正解らしい。ならアクティブと言うのも大体分かるので「大丈夫」と伝えると俺は気になる項目を見つけたのでそっちを聞いてみる事にする。

「このFっていうのは？」

「それは――」

ふむふむ、何でも【力、魔力、速さ、幸運】と言うものがありそれぞれA～FまでランクがAが最高ランクであり俺の魔力は最低のFだという。

因みに、俺は地球の神の加護がないので与えられた魔力もその他のランクもFである事をデスに告げられる。

なんだよ、魔力位規格外にしてよ。テーブル神ケチだな。

すると俺の考えを感じ取ったデスが「馬鹿野郎！ 神が干渉してお

前に魔力与えるなんて本来ならしない名誉な事なんだぞ!! 文句があるなら魔力無しにしてもらってもいいんだぞ!!」と怒鳴る。

ひい、やだそれは無理! 魔法とか魔術は男のロマンです! ターブル神様ありがとうございます!

俺は心の中でターブル神に祈る。

「分かればいいんだ馬鹿野郎」

そう言って説明は続く。

なんでもFと言ってもピンからキリまであり、俺は中でも最低の魔力しか持たないと言う。訓練すればランクは上がるらしいが一つランクが上がるのには相当な訓練が必要らしい。

どうやら世の中ターブルも甘く出来てはいないんだね。

一通り、簡単な説明を受けて俺は「あの家は何?」と問いかける。

「あれはお前の家になる予定だったが能力とか分かったからガガの村は閉鎖だ。ターブル神が今ターブルに繋がるゲートを開いてくれるそうだ。あ、後細かい説明とかは面倒だから現地に着いてその場で教えてやる」

「了解! ああ、ターブルどんな場所かな」

ニヤニヤと笑みを浮かべながら俺はゲートと言うのが開くのを待っている。デスが「開いたぞ」と草原の方を指差し俺もその方に顔を向けた。

少し離れた場所に二本の光の柱が突然現れる。

「おお、綺麗だな」

デスに声を掛けると光の柱を睨み付け微動だにしない。

どうしたんだろ？

俺は気にせず、ゲートまで歩いて行こうととぼとぼ歩き出す。

「ヤマダ待て！！」

デスの罵声が響く。

すると頭の中で電子音がけたたましい音を上げる。

「うるさっ！！ な、なんなんだあ！？」

余りの五月蠅さから足を止めて耳を塞ぐ。だが、それは意味がない。直接頭の中に響く音だからだとは分かっている。でも耳を塞いでしまうと突然音が止み光の柱が二本とも、ふっ、と消える。

【ヤマダ干渉者がいる。危険だ。なんとか乗り切れ】

え！？ どういう意味だ！？ デス！？

振り返るとデスの姿がない。

キョロキョロと辺りを見回すが誰も見当たらない——いやいた。光の柱がたった場所に魔法陣、それを入るのを阻むように立つ人物が俺を

見つめてニヘラ、と笑っている。

「え？」

いや、あり得ない。

黒い髪に黒い瞳。

見覚えのある短いアシンメトリーの黒髪。

無地の白いTシャツに黒のデニム。

全てに見覚えがある。

「まさか？ このイケメン俺？」

【アホか、お前はお前が思ってる程格好良くはない。むしろ下の上
が丁度良い位だ】デスの余りに現実的^{リアル}な酷い言葉に俺は泣いた。

夢ぐらい見させてよ。

「デス、それは酷すぎる」

俺は地面に四つん這いになり地面に顔を向けて泣いてますよとデスにアピールする。

【馬鹿野郎！ 立って前を向け！】

「え？」

四つん這いのまま前を向くと目の前には誰かの足。それに気づいた時には俺は横に倒れていた。

何が何だか分からない。

「い、いてえ……」

顔を蹴られた事に気付いて立ち上がると膝がガクガクする。

前を向くと笑ったままのもう一人の俺が口を開いた。

裏チュートリアル（中）（後書き）

もう少し、ページを多く書きたいです（汗）

次でチュートリアルは終わりです。次が終われば本格的な異世界に突入します。
頑張ります。

裏チュートリアル（後）（前書き）

感想まで頂けて感謝感激です（＊、▽、＊）

もう涙で前が、再び拙い文ですがよろしくお願いいたします。

裏チュートリアル（後）

「よう俺」

ニタニタと笑うイケメン（俺）を俺は怪訝な顔をして見ている。

何だがよく分からないが顔面に蹴りを入れられたみたいだ。膝がガクガク震えている。これが足にきていると言う状態なのか？
というか何故俺が二人？

【おい、気をつけろヤマダ。今解析を掛けたあのムカつく不細工は地球の神の加護を貰っている】

いや、あれ俺なんですけど不細工って……しかも加護ってずりいな。
てか、何処にいるのんだ？ デス？

【危険を察して幽体化した。後、すまん。私は本音しか言えないんだ】

それは酷いカミングアウトを受けた。

膝はガクガクだし俺のハートもブロークンしそうだ。
若干涙目になってるのは蹴られたせいなんだからね！

「なあ俺、お前何したんだ？」

未だにニタニタしているもう一人の俺は前髪をかきあげながら言う。

「……何にも？」

全く思い当たる節がない。と言うか何の事を言ってるんだ？

「いやしてる筈だ。お前は神に捨てられるだけの事をしている。だからドッペルゲンガー、つまり俺がこの場に送られてる訳。慈悲でこの世界にお前を送った神様はやっぱりお前が気に食わないんだよ」

ああその事……って、ドッペルゲンガー！？ マジスカ！？

【随分驚いているがドッペルゲンガーとは何だ】

ドッペルゲンガーはもう一人の自分で見たら死ぬって言われてる地球の怪談話。まさか本当に実在してるとは思わなかったが。

【成る程な、確かにヤマダは死ぬかもな】

え？ マジ？

【ああ、あいつは規格外だぞ能力は全てAランクだ】

え、なにその無理ゲー詰んだじゃん。

俺は悪態を吐く。

「何、ぼうつとしてんだ俺？ 思い当たる節があったか？」

ドッペルゲンガーは指をポキポキと鳴らしている。あれは俺が小さい子供を威嚇する時にやる仕草。

【小さい子供って最低だなヤマダ】

ちよつとデスが何を言っているのか分からない。

そんな事は無視。それより不味い、Aランクと言うぐらいだから下手な事を言ってアイツが本気で攻撃してきたら死ぬる。
だが、アイツは俺だ。おだてれば言うことを聞く筈だ。

【本当に大丈夫なのか？ それで】

ああ、アイツが俺ならイケる筈だ。俺ならな。

「ちよつと待ってくれイケメン。今考える」

「イケメン？ 分かった、待とう」

ポキポキと指遊び（威嚇）を止めて腕組みをするドッペルゲンガー。

ふつちヨロいな。

【おいアイツ絶対に鏡で自分の姿見た事ないぞ。しかも究極の馬鹿だ。ちゃんと待ってやがる】

だからあれ俺。デス酷すぎる。

【むうすまん。つい本音がな】

ふふ、頬を熱い物が伝っているのは冷や汗なんだからね！

【私も気になるが何かあちらの神にしたのか？】

いや分からん。あるとすれば……。

心当たりは一つだけあった。だがこれが原因では無い気がする。

【一応アイツに言ってみろ。外れなら違うと言うだろ】

まあ、確かに。

腕組みして上機嫌なドッペルゲンガーに声を掛ける。

「なあ俺。それは俺がニートな事か？」

【ニートとはなんだ？】

ああ、それはな。仕事もせず、部屋に籠り親を泣かす人種の事だ。ちなみに俺は部屋に籠りはするが買い物に行く時は外に出るプチニートだ。

【ヤマダやっぱりお前最低だな】

やっぱりデスの言う事はたまに分からない。

とりあえず、これ以上心に被害が来ないように聞き流す事にした。

「違う。働いたら負けだろ。ニートは正義だ。俺は生まれたくて生まれたんじゃない。親は俺達を生んだんだから養う義務があるしお前だってそう思うだろ。それに神はそんな事じゃお前を捨てる訳が

無いだろう」

……確かに。

【アイツ、不細工で馬鹿で最低野郎だな】

もうデスの言う事は何も聞こえない。

「もういいか？ 充分待ったろ？ 分からないなら分からないままお前は死ね」

ヤバい、アイツやる気だ。

【みたいだな、右手に莫大な魔力が集まってきている】

生きる為になんとかせねば！

「ちょっと待て！ 女殺しのお前ならもう少し待てるだろ！」

右手をぎゅっ、と握りしめて俺に近づこうとするドッペルゲンガーはピタリと足を止めて顔を歪ませ右手を振り上げる。

【流石にいくら馬鹿でも無理か。短い付き合いだったなヤマダ】

糞！ ダメか……俺はここで死ぬのか……。

「確かに女殺しの俺なら待てるな。充分に考えろ」

ゆっくりと右手を下ろすと再び上機嫌で腕組みをするドッペルゲンガー。

ふう、ヤバかった。

安堵し胸を撫で下ろす。

【アイツは……いやもう何もいわん。掛ける言葉が見つからん】

素晴らしい過ぎて掛ける言葉が見つからないんですね、分かります。

【……………】

デスは無言。何か悲しくなったが、今はどうやってこの場を乗り切るかだ。

アイツを何とか避けてゲートに向かえば助かるだろうか。

【仮にも奴は馬鹿とは言えクラスAの実力者だ。その素振りを見せればすぐ殺されるだろう】

馬鹿？^{うましか} やっぱりよく分からない。

だが、デスの言う事は最もだ。奴の注意をしばらく逸らせればなんとかなるんだが。

ほんの一メートル程の距離だが、今は何百メートルも離れている気がする。

【簡単な話だ。奴はお前だろ？ ならお前ならどんな事に反応してどうしたら注意を逸らせるか考えたら良いだろう？】

そうか……奴は俺だ！　なら。

俺は思考を走らせる。そして一つだけ方法を思い付いた。
くっくくく、これなら間違いなくイケる！

【なっ……馬鹿な。私はそんな事手伝わんぞ!!】

俺の思考を読んだのだろう。デスが叫ぶ。だが、この作戦にはデスの協力が不可欠だ。

頼む！　デス！　この方法しか助かる道は無いんだ！

【いや他の方法を考えろ！　私には無理だ!】

神に見捨てられた俺をデスは見捨てるのか？　頼むデス!!　まだ俺は死にたくない!!

【……………】

しばし、無言。上機嫌なドッペルゲンガーを見るとだんだん苛々しているのが見てとれる。

ヤバイ。奴は俺だ気が短い。もう少ししたら痺れを切らして殴り掛かって来るだろう。

もう俺はここで終わりか。ああ、短い人生だった。

【……くっ、分かった、一度だけだ。もう二度とこの方法はどんな事を言われてもしないからな!!】

あ、ありがとうデス!!　愛してるよ!!

俺は心から歓喜しデスに感謝の言葉を告げる。

【……お前に愛を説かれてもそんな気、起きんがな】

酷い、でも今回はいいや。助かるなら。

「おい！！ イケメンで女殺しの俺でも流石に我慢の限界だ！！
分からないなら知らずに死ね！！」

予想通り、ドッペルゲンガーは待つ事に耐えきれず、苛立つ声を上げ右手を大きく振りかぶる。

今だ！！ デス！！

「お、お兄ちゃん！！」

びくっとドッペルゲンガーが体をビクつかせる。

「お……兄ちゃん??」

ドッペルゲンガーが声のする方に顔を向ける。

そこには顔を赤面させて手をモジモジさせるデスの姿が……グッジョブ！ デス！ 良いよ！ 効いてるよ！

「誰に……言ってるんだ？」

デスに問いかけているんだろう。右手をゆっくりと戻すと身体をわなわなと震わせている。

デスは恥ずかしそうに俯いて、

「そつ、そつちの、イ、イ、イケメンの、お、お兄ちゃん。お、お願ひがあるのお」

顔を引きつらせながらドッペルゲンガーを指差す。

ドッペルゲンガーは一瞬よろめきを見せる。膝に來たのか。なんと
いう俺殺しなデス！

そんな健気に俺を誘惑するデスの頑張りに報いねば。
一步、また、一步と魔法陣に近づく俺。

時を同じくしてドッペルゲンガーも一步、また、一步とデスに近づく。

ふふ、計画通りだ。このロリコンめ。

ああ、自分で言ってて辛い。

「なんだ？ このイケメンのお兄さんに言ってみなさい」

ぷ、イケメンって、お前はどうせ下の上位だよ、不細工。

ああ、何故だろう。何か大切な物を俺は無くした気がする。

後、少しだ。後少し。頼むぜデス。

もう魔法陣は目の前だ。

「ぼ、ぽ、ぽ、ぽんぽんが痛いのお……な、撫でてお兄ちゃん」

大分、デスには無理をさせたみたいだ。口をひくつかせて顔が歪んでいる。まるで茹で蛸だ。可愛い、可愛いよデス。

「分かった!! お兄ちゃんがなでてあげるぞお!!」

ダメだ、アイツ終わってる。気持ち悪い。引くわ。

これはなんだ。汗で視界が歪んでいる。

俺は歪む視界の中、魔法陣へ飛び込む。

それを確認したデスがふっ、とその姿を一瞬で消した。

【ああ!! 一生の恥だ! お前がゲートを越えたら封鎖する様に神に頼んであるからな!】

ありがとう、デス。

「なっ、消え……貴様待て!!」

今頃気付いても遅いわ。粕が。

ああ、もうダメだ汗で前が見えない。

「お前みたいな変態でクス野郎は俺じゃない!!」

ドッペルゲンガーに罵声を浴びせる。目映い光に包まれ――崩れ落ちるように膝を着いて泣いた。

裏チュートリアル（後）（後書き）

えー次からようやく異世界です。ふふふ、主人公は最低野郎です。
これからも山田太郎さんには頑張って頂きます。

では拙い文ですがよろしく引き続きお付き合いよろしくお願いいたします（人、▽、）

深緑の大陸ユーファの異変1（前書き）

他の方が書いてらっしゃる小説見ると凄すぎて自分の文が駄文だと言う事を更に思い知らされました（汗）

作者のは描写が拙いですし文が……（汗）
愚痴はこれくらいに（＊＾＾＊）

すいません所用でもしかしたら25日まで更新出来ないかも知れませんが（汗）

お気に入り登録7件感動しました（＾＾ω；）ブワ

PVが1354

ユニークが288

更に感動です（トート）

深緑の大陸ユーファの異変1

どうやら逃走は成功したようだ。

私はゲートが閉じるのを確認して辺りに視線を向けてその異変に気が付いた。

この場所は深緑の大陸ユーファのアサギ村。緑豊かな大地を利用した農業が盛んな村である。

住宅は木造で深緑の大陸ユーファでは一般的な物。唯一村にある石造りの頑丈な建物はターブル神を信仰する教会。

その何処からも人の気配がしない。それどころか昼間だと言うのに誰一人村の中を歩いている姿を見掛けないのだ。

小さいながらも活気のある村で有名なこのアサギ村でこのような状態はあり得ない。

幽体化したまま辺りを牛舎や馬小屋を見回るが馬や牛等の家畜も見掛けない。

どうしたと言うのだ？

「ふひ、あれは俺じゃない。ひひ、あれは孔明の罠だ。俺はもっとまともだ」

何やら地面に膝を着き、ヤマダの項垂れながら力無く笑っている。孔明とは一体どんな人物なのだろう。地球の神なのだろうか？

【ヤマダ、孔明とは誰だ？】

尋ねようと声を掛けるも死んだ魚の様な目をしたヤマダには私の声

は届いていないようだ。

現実逃避している様だからしばらく放って置くか。

私はヤマダを放って置き、調査を続ける。木造の家をすつ、と幽体化した身体が通り抜ける。

目に入るのは木造のテーブルに椅子。食器棚、台所にベッドと言ったユーファでは一般的な家具。

どうやら一人暮らしの家なのは分かった。その家内の様子を見渡すとベッド膨らみがあるのに気が付いた。

なんだ、寝ているのか。

だが、おかしい。先程から生命の息吹きと言う物を感じない。

そのままベッドに近付いて幽体化を解除し毛布を捲る。

「ぐっ、これは……」

目に飛び込んで来たのは全身の水分を全て抜き取られミイラと成り果てた住人の変わり果てた姿だった。

多分、そのミイラは男性だろう。ユーファ大陸特有の男性用の民族衣装を身に纏い、目を瞑ったまま横たわる姿ただ黙って観察し、思考する。

死後、かなりの時間を経てミイラになるものだがミイラになるまで、この異様な光景に誰にも気付かず発見もされず、アサギ村に訪れるであろう、旅人や冒険者、商人、プレイヤーが誰一人もこの現状の村を見逃すだろうか？

いや見逃す筈がない。

なら変種の魔獣が村を襲い、身体中の水分や体液と吸い取ったのか？

だが、民家には荒らされた形跡も無く、ドアは鍵が閉じられている。

ならばほんの数日でミイラに成り果てる病気があるのか？

いや、そんな新種のウィルスの様な物があるなら情報が入る筈。

ならなんだと言うのだ？

考えるも答えは分からない。情報が足りない。とりあえず、手掛かりになるものを探しに他の民家も回る事にしよう。

幽体化すると私は次の民家に移動する。

何件も建ち並ぶ民家を幽体化しては中の様子を伺う。

どの民家の住人もベッドの上で目を閉じ眠るようにミイラと化していた。

最後に石造りの建物にはたどり着く。石造りの壁を通り抜ける。

これは……！？

丁度教会の中心部、そこには体長一メートル程体色が暗褐色で黄色と黒の変な模様のある巨大な虫が重檜で貫かれた状態で生き絶えていた。

その虫に幽体化を解除し近付いて観察。虫の前肢が強大な鎌状で鋭い爪も備わっているようだ。口から太い針状の突起物が出ている。

その虫はこのテーブルでは見たことがない物だ。

新種だろうか？

「誰……だ？」

生存者か！？

直ぐ様声をする方へ顔を向けると腹から押さえた金髪の大男が祭壇の影からよろめきながら出てきた。

身に纏った銀色の胸の甲冑には鋭く強力な力で引き裂かれた爪痕のような傷が禍々しく残っている。

多分、あの虫を倒した重槍使いだろう。

「お嬢ちゃん……何処から来た？ ……ここは危険……ぐっ！？」

けたたましい音を上げて大男が床に崩れ落ちる。その顔色は真っ青だ。

「お嬢ちゃんではない。私はデバイスだ。冒険者、何があった」

祭壇に凭れ掛かるようにして起き上がると大男はへらっと笑う。

「デバ……イス、だと？ 俺にも運が……向いて……きたな。デ、バイスに宿る精霊を具現化出来る程の……プレイヤーがこの村に来たとは……」

どうやらプレイヤーでは無いようだ。デバイスが見当たらない。ならノンプレイヤーか。

「期待させてすまないが私は特別製でな。私の宿主は精霊を具現化させる程の実力者ではない。ただの馬鹿野郎だ。それより……何があった？」

「マジ、かよ、おい……ならとりあえず……解毒してくんねえかな？ その……馬鹿野郎に……頼んでさ……身体がまともに言う事が効かねえんだ」

真っ青な顔をして力無く大男は笑う。
毒か……うむ、市販の毒消しが効けばいいんだが……。
ちらりと虫を見遣る。

「アイツは解毒魔術を使えない。緊急時だ。道具屋から取ってこようしばし待て」

「へっ、使えねえプレイヤー……だな……頼むぜ」

道具屋に向かおうとしたその時だった。ガン！ と乱暴に教会の扉が開け放たれた。



ソイツが現れたのは俺は現実逃避を終え、辺りをキョロキョロと見渡している時だ。

俺はよくわからない田舎の村の様な場所にいた。誰も歩いていない

ので廃村かと思ったが建物は草臥れたり廃れたようには見えなかった。

デス？　ここどこ？

……。

返事はない。ありゃ？　トイレかな？

デスからの返事もないのでふらっと歩き出す。
すると後ろから足が聞こえる。

ん？　第一村人か？

等と軽い気持ちで振り返る。

それはそう、もう手を伸ばせば届く距離にソイツはいた。
俺とソイツはしばし見つめあっていた。多分数十秒。ぞくぞく、と
悪寒が背筋に走る。

俺は直ぐ様、踵を返しソイツから離れる為に走り出した。

「何じゃありゃああああ！？」

私、山田太郎は全力で地を蹴り、場所がよく分からない民家の間を
駆け抜けていた。

こんなに走ったのはいつ振りだろう。
多分小学校の運動ぐらい遡る。

いや、そんな事考えてる場合じゃねえ！！

『フシュフシュ』

走りながらちらちらと後ろを確認。距離は離れているが間違いなく俺を追い掛けて来ている。フシュフシュじゃねえよボケ！……マジヤベえ。幸い、足はそれ程速くは無いようだ。

なんだあの巨大なタガメは！？ 助けて！ デス！

先程もデスに呼び掛けてたが以前としてうんともすんとも言わない。

なげえトイレだな！！

トイレとも言われてもないのに勝手に決め付けて悪態を吐きながら俺は必死に巨大タガメから逃げているがそろそろ息が上がってきている。

少し離れた場所には石造りの建物。彼処に逃げ込もう。頑丈そうだ。

俺は力を振り絞り、全力で地面を蹴る。

目前に扉が見える俺は体当たりするように扉に飛び込んだ。

飛び込むと同時に扉を閉めて近くにあった長椅子を力任せに引っ張り扉が開かないように押さえつける。

押さえつけたと同時に激しい衝撃が腕に走る。

「つてえ！？」

何とか押さえつけられたか腕が痺れている。

なんつう力だ！

【ヤマダか！？】

デスの驚いたような声が頭に響いてきた。

「デス！ 巨大タガメに襲われた！ 助けてくれ！」

【タガメ！？ よく分からんが黒い大きな虫か！？】

「ああ！！ ヤバいもう押さえつけてもらえない！」

何度も体当たりしているだろう。俺の非力な力ではこれ以上押さえつけてもらえない。だが、それよりも先に扉が壊れてしまいそうだ。ベキベキと巨大タガメの前肢が扉に突き刺さっている。

【魔力を使え！ もしかしたら退ける事位なら出来るかもしれないねえ！】

「魔力って言われたって！？ どうしたら良いんだ！？」

【なんでも良い！ イメージして放て！ ヤマダ！】

イメージって、もし出なかったらどうすんだ！？

その間も徐々に扉がその原型を無くしていつている。巨大タガメの開けた亀裂から巨大タガメの黒い大きな目がこちらを覗く。

ああ！　どうなっても知らねえぞ！！

俺はイメージする。自分の右手からあのタガメの黒い目を貫ける物。なんでもいいから出る！

「おらああああタガメ死ねやあああああ！！」

右手を扉の隙間に向けて叫ぶ。刹那——右手から淡い光が放たれた。

深緑の大陸ユーファの異変1（後書き）

山田さん魔術を使う。ですね。

タガメはどうなるのか？

大男はどうなるのか？

山田さんはどうなるのか？

次も引き続き暖かい目で見てやって下さい（人、△、）

深緑の大陸ユーファの異変2／山田、華麗に逃走（はしる）（前書き）

やっと出来ました。

ああ、ヤマダさん。書いてて楽しいです。

拙い文ですがお目汚し申し訳ないです。

今回不快になる方もいらっしゃるかもしれないのでここで謝ります。
申し訳ありません。

でも自分の書きたいヤマダさんはこういう子なので別にこのヤマダ
気にならないよ、と言う方はこのまま引き続きお付き合いしていた
だけたら幸いです＞（――）＜

深緑の大陸ユーファの異変2／山田、華麗に逃走（はしる）

——それは俺が規格外ならば問題は無かった事なのだ。
右手から淡い光を放って期待してしまった。

あれ？ これもしかしたら勝てるんじゃない？

そう思ったのが間違いでした。



これはキタ！ 魔術？ 魔法？ どっちでもいいや！

右手から勢い良く放たれたモノを俺はマジマジと見つめる。

それは勢い良く放たれた筈でした。ええ、間違いなく。
俺はタガメの目、目掛けて放った筈でした。

確かにそれは当たりましたよ。

「……嘘おおん」

気の抜けた声が漏れた。

俺の手から放たれたモノ。

それは先の尖った小さな氷の柱。多分、名付けるとしたらなら【ア
イスニードル】だ。

小さい。そうそれは小さかった。正確に言えば小指サイズ。

タガメの目に当たりペキン、と小さな音を立てて折れる俺の渾身のアイスニードル。

『フシュ?』

流石のタガメも疑問系。

分かります。あれ? ゴミ入ったかな? ですよね?
だが、一瞬、タガメの動きが止まる。

ここぞとばかりに扉から離れて距離を取る。

【ヤマダ!? 奴は少しは怯んだか!?】

デスの心配そうな声が頭に響く。

いや、もう思考読んで、デス。

バキヤン! という破碎音と共に砕けた木の欠片が宙に舞う。
そうしてゆっくりとタガメが侵入してきた。

ああ、破られたわ扉。

【なっ!?!】

「……糞、俺も……ここまでか……」

ん? 誰、今の声?

声のする方を見遣る。そこには銀のイカした鎧を着た金髪のデカイ

男が真っ青な顔をしてタガメを睨んでいた。

誰？ あれ？

疑問に思ったが俺はタガメに視線を戻す。余所見して死んでしまっただけ元もない。

『シュウウウ』

タガメはその場から動こうとせずに俺とそのデカイ男交互に見比べている様子。

多分、どっちから襲おうか考えてる感じね。

「くっ、殺るなら俺を……殺れ化け物お……!!」

掠れた声でデカイ男が吠える。よく見るとイカした鎧に爪痕が見える。そしてこの場所の中心部にはデカイ槍が突き刺さった既に絶命しているタガメがいた。

【ヤマダか？ 冒険者か？ アイツは選んでいるな。あの冒険者自分を犠牲にしてお前を逃がそうとしてる男気がある奴だな】

マジか！？ なんていい男！

【ああ、そうだな。だがタガメとやらはお前を見つめているぞ】

何だって！？

タガメは確かに俺を見つめていた。あっちは逃げられないしお前から殺るみたいな空気を感じられる。

ヤバイ！！ あっち食べよ！！

【ヤマダお前は最低だな】

デスの声は耳に届かない。

俺は気が動転してパニックを起こしていた。

不味い、入り口はタガメが塞いでいる。あの男の方に行けば俺は逃げれるのに！！ ふざけんな！！

あたふたとその場で駆け足。くるくる回るといふ不思議な行動をしたせいかタガメの動きが止まる。

はっ！ まさか！？

確か聞いた事がある。猛獣相手に弱気を見せてはいけないと何かのテレビ番組で見た事があるのを思い出した。

そして俺は弱気を見せまいとタガメに罵声を浴びせるべく口を開く。

「タガメエエエ！！ テメエのIPアドレスから特定してやつからなああ！！ 俺の友達のスーパーハッカー頼むぞゴラァァァ！！」

そう俺はテンパっていた。そうテンパっていたんだ……。だから何を思ったかこの魔法言葉をチョイスしてしまった。だが叫んでしまったらもう遅い。

おかしいと思いながらも俺は叫び続ける！

【……何だそれは？】

呆れたようにデスが言う。デカイ男の目が点になっている。
俺は未だに叫び続けている。

だが、タガメには案外効果があった様でビクッと一回身体を震えさせる。

これは勝機！　ここぞとばかりに俺は吠える。

「絶対特定する！！　絶対特定する！！　テメエの住所特定してやつからなああああ！！」

そして何を思ったか俺はタガメを右手で指差しながらにタガメに向かって歩き出した。

もう俺の歩みは止まらない。引かない！　引いたら殺られる！　なら特定してやる！

そんな思いが届いたのか、タガメはビクッと再び身体を震えさせ、俺から視線を反らすと、身体の向きを変えいそいそとデカイ男に向かって歩き出した！

「ヨッシャアアアアア！！　俺の変わりに死ね！！　見知らぬ男！！　イヤッハアアアアア！！」

俺はパニックになりながら勝利に興奮していた。
要らぬ本音まで駄々漏れである。

【ヤマダにはもう掛ける言葉も見当たらねえ】

！？ 興奮していてよく意味が分からない。

壊された扉まで一気に駆け抜けけると俺は振り返る。

デカイ男は首筋にタガメの鋭い針を刺されて意気消沈。というか虫の息。

「……………の……………む……………ラ……………フ……………エ……………ルの、……………街の……………ア、リ、サ、に、俺の、事をおお……………」

ひいいい！ あんな風には死にたくない！！

男は自分の中身を吸われ干からびて息ながらも掠れた声を必死に発する。

ちょっとマジで掠れすぎて何を言っているのか聞き取れない。

唯一聞き取れたのは「俺の事をおお」だ。

何？ あいつ俺への恨み言かな？ もう諦めて死んじやいなよY O U。

それに死んでいく人の目を見ると取り憑かれるってママンに昔言われた事がある。

俺はこの恐怖の廃村から抜け出すために華麗に駆け出した。

その間もデスは何か言っていたが俺にはちよつと聞き取れなかった。



目の前に広がるは大草原。その舗装された道を俺はパンパンに張った脹ら脛を労りながら進む。

「なあ、デス？ このまま進むと何処に着くのか分かる？」

既に幽体化を解除して両手を後ろに右手首を左手で掴みながら歩くデスに問い掛けると何処か不機嫌そうなデスは唇をつんと突き出して「……ラフェルの街だ」と言っつてふて腐れている。

仕草は可愛い。が声は沈んでいる。

幸い、デスは禁句以外は痛い事をしては来ないので助かったがあのタガメ村から脱出してからずっとこの調子である。

「まだ根に持ってるのか？」

「だってな。あの男の最後の言葉くらい聞いてやっても良かったじやねえかよ」

まあ、確かに。でもあれ恨み言でしよどうせ。俺が興奮してポロリと本音を言っつたし。

頭をポリポリと搔いて「でもさ、本当に聞き取れなかつたんだわ。んじゃ何でデスは幽体化してたんだから近くで聞いてやらなかつたのさ？」と再び問い掛ける。

「いや、それは……っ……らだ」

俯いて何か言いにくそうな感じのデスはボソボソと聞き取れない位

の声で呟く。

「え？」

素直に聞き取れなかったのもう一度尋ねる。

「だから！ あのタガメが気持ち悪かったからだ！」

ああ成る程。確かにあんなデカイタガメ見たら誰でも近付きたくないわな。

そのまま、俺は恥ずかしそうにしているデスには何も触れずに歩き続ける。

これ以上突っ込んで痛くされたら堪らんからな。

「聞こえてるぜ、ヤマダ」

ひい！ ごめんなさい！

こうして歩く事、二時間程だろうか。全く街が見える気配が無い。

むしろ緑の地平線。

「なあ後どれくらいで着くんだ？」

そろそろ足も限界だ。だってニートだったもの。

「ああ、後一日程歩けば着くぜ」

「一日ね、了解」

「おう」

……ん？ 一日？ 二十四時間？ はぁ！？

さらりと会話していたが何だって？？ それ無理！！休めるとこないの！？

「無理か、ヤマダだからな。分かるが休憩小屋があるのも後、三時間程歩いた場所だ。我慢しろ」

俺の考えを読み取ってデスがさらりと言う。

「いや！ マジスカ！？ 腹減ったしマジで無理！」

「ギャーギャー喚くな！！ あんまりうるせえと例のアレやるぞ！！」

「すみません、歩きます。いや歩かせて下さい」

今この状態であれやられたら歩けなくなる。

「それにな、腹減ってんならお前のちゃっちい魔術で氷だして舐めてろ。魔力を扱う練習にもなる」

成る程、一石二鳥か。

直ぐ様、俺は口を開けて掌を口の中に向ける。

「【ハーフニーホル】……ぐほおっ！？」

口を開けていた為上手く喋れなかったがこれは酷い。
結構な勢いでアイスニードルが俺の喉を強襲しやがった。

「うおげえ、ぎひ、ゲホゴホ！」

声にならない。刺さらなかったから良いものの嘔吐感が込み上げてくる。

「何を遊んでやがる、ぷ」

デスは吹き出して笑っている。

俺は立ち止まり口からアイスニードルを吐き出して「うげええ」と嘔吐した。

何も出なかったが。

嘔吐感が落ち着き、デスも笑い終えた頃、デスから魔力の扱い方を教わった。

「はあはあ、笑った。ヤマダ手を握って、飛ぶなここで待機って思いながらも一回やってみな」

こくりと頷き俺はデスの言われた通り手を握り、飛ぶなここで待機と思いながらも「【アイスニードル】」と唱える。

すると俺の掌にヒヤリとした感覚。手を開いてみるとアイスニードルが何処にも飛ばずにそこにあった。

成る程、意思を込めるのも大事か。

「まあそういう事だ」

「勉強になります」

そのまま三時間俺はアイスニードルを出しては舐め続けた。

休憩小屋に着いた頃にはすっかり辺りは薄暗く空は赤と黒のコントラスト。

言うまでもないが俺は魔力を使いすぎてへろへろになり冷たいモノを摂取し過ぎて腹痛を起こした。

深緑の大陸ユーファの異変2／山田、華麗に逃走（はしる）（後書き）

次は遂に大きな街に突入です。

いやヤマダさんは本当に酷い奴です（笑）

では引き続きお付き合いして頂けたら幸いです。

真夜中の乱入者（ドッペルゲンガー）（前書き）

前の章の誤字です。

P2 ページ目。

干からびて息ながらも×

干からびていきながらも○でした。申し訳ですf（^^；
というかいつの間にか2000PVを越えました（ゝ；ω；ゝ）ウ
ルウル

お気に入りも9件Σ（◇、＊）エエッ

400ユニークを越えました（ーーー） 本当に感謝です。
ちよっと街に行くといいましたがすいません（汗）

この一話挟んで街に入ります>（| |；）<
拙い文では有りますがこれからもよろしくお願いいたします（人
ω、）

真夜中の乱入者（ドッペルゲンガー）

たどり着いた休憩小屋。

木造建てで簡易的な造りだが中は五人ほど横になれる広さ。中には、誰が使ったか分からないちよつとやんごとなきにほいがする毛布に暖炉。それに備え付けのテーブルに固定された椅子が五脚。

「こんな造りでは魔獣の襲撃にあつたら終わりではないか」

とデスに尋ねたが魔獣の嫌がるクスの実の匂いを定期的に塗り込んでいる為、魔獣は近寄らないと言う事だ。

なんと良い事を聞いてしまった。今後の安全の為にクスの実を購入出来たらしいという思いを密かに胸にしまう。

だが、今はそれ所ではない。定期的にくる腹部に走る悪魔のような痛み。山を越えれば治まるのだが、次に来るのは初めの痛みを越えたビックウェーブなのだから達が悪い。

簡単に言う汚い話だか氷の食べ過ぎで腹が下り俺は催していた。

時に今は深夜。部屋に明かりは無く、この休憩小屋は静寂に包まれていた。

その静寂を切り裂くように鳴る俺の腹！

「おーいうるせえぞヤマダ」

デスのお怒りの声が聞こえる。

だが、今の俺はデスに返答を返せる状態ではなかった。まさにビツクウェーブが到来していたのだ。

ちなみに余談だがデスはそのやんごとなきにほいの毛布を臆す事無く、被って雑魚寝をしている。

それは俺もそうだが現在この部屋の温度はマイナスに近いのではないかと思う。鼻っ柱が冷たい。

あのにほいに耐えられない俺は顔を出しっぱなしにしているが冷や汗ダラダラで感じる空気が冷たいので顔に針を刺したような痛みを感じている。

更に余談だがこの小屋にはトイレがない。紙もない。

つまり外で——でしなくては、草で——を拭かなければならぬのだ。

あえて伏せ字にさせて頂いた。これは一重に俺が紳士だからである。

俺には、一つだけ隠された特技がある。俺は学校の一時間目から催しても家に帰るまではトイレを我慢出来ると言う素晴らしい特技を持つ俺でも最早、ここが限界の様だ。

ゆっくり、刺激しないように立ち上がり内股で歩く。何故か内股になってしまうのかそれは生命の神秘であり、俺は分からない。

「くっ、お……………あ？」

このセリフでは俺が——しまったと思われる方もいらっしゃるのではないか？ それは否だ。決して否。

紳士である俺はけして下着は汚さない。

ならば、何か——そう雑魚寝をしているデスを踏んづけてしまったのである。

「いってなあヤマダああ!!」

デスの罵声が俺の腹を刺激する。

俺は今は安易に喋れないので思考する。

待ってくれデス！ すまなかったあ！ 頼むから今はあの痛いのは止めてくれ！
でないと……。

「ああ、分かってるよヤマダあ……私も鬼じゃねえさ。ここでされたくないしな」

良かった……なら先を急がせて貰う。本当にすまなかった。

小刻みに歩みを進めながらも謝る事を忘れない紳士^{おれ}

ドアまでもう少しだ。うつすらとドアの隙間から月明かりの光が差し込んでいる。

ああ、待っていてくれ天国。もうすぐそこに……。

不意に背後で誰かが立ち上がる気配。布が擦れる音。
なんだ？ デスカ？

一体どうしたのだろうか？

「鬼じゃねえがな……私はやられたらやり返す主義だ!!」

ブン、と何かが風を切る音。そして次の瞬間、俺の——に突き刺さる衝撃!

「!?!?!」

声にならない。俺は堪らず外に飛び出した!

飛び出した途端に暴れる竜を抑えこむ為に俺は絶叫した。

「ぬがあああああ!!」

小屋の裏まで刹那の速さでたどり着きズボンを神速で下ろす。

そして、俺を——幸せが包み込んだ。

まさにあり得ない解放感。

いや、紳士である俺はここからの描写はあえて省かせて頂く。

事を終えて俺は草を探していた。それは直ぐに見つかったのだ。それをむしるといざ拭かんとする時に気が付いた。

【草が足りない】

そう一度では足りないのだせめてウオシユレットでもあれば別だか

——あ? ウオシユレット?

俺の瞳は月明かりに照らされて妖しく輝く。

俺には魔力。魔術というモノがあるではないか!?

多分、俺ならば出来る筈だ。得意の妄想を駆使するんだ。

ならば——いざ山田太郎、異世界で推して参る——。

——発動する座標を指定。

——魔力量を調整、水の強さは汚れすら残さない強。

——後は意識を集中させる。

俺なら出来る！

今日覚えたての魔術だがお前はあんなに妄想をしろう！ 太郎！

そうだ俺は魔術師タロウヤマダなんだ！

俺だけの固有結界^{トイレ}みせてやんよ！

ウォシュレット位、魔術で模造する事は造作もない！今日覚えた事を応用するだけだ！

いざ——。

「——【アイスニードル】……あ？」

失敗した。失敗した。失敗した。失敗した。失敗した。失敗した。

ここは水^{スプレット}だろ常考。なんで俺は今日やった事をまた同じようにやっているんだ！

ふっ、もう発動は止まらない。お尻にヒヤリと冷気を感じる。

そう！ 失敗じゃない！

これは成功だ！

右手以外からも魔術を発動出来たじゃないか！
なら潔く逝こうじゃないか――。

「アーーーーー！！」

夜の闇に俺の悲鳴が木霊した。



「うるせえぞヤマダ！ 寝れねえだろ静かに――位出来ねえのか？」

おま！ 女の子がそんな言い方しちゃいけません！

紳士の権限で伏せ字にしますからね！

「うっせ、早く寝ろ！！」

「はい、すいません」直ぐ様毛布にくるまる。

うん臭いね毛布。

ちなみに俺は固有結界^{トイレ}ウォシュレットを成功させた。
なんか、俺。地味に水の魔術まで覚えてしまったみたいだ。えへ。

【ヤマダ、静かに聞け】

ん、なんだデス？

俺はデスの言葉に耳を傾ける。

【感じた事のある魔力だ。多分、ドッペルゲンガーが近くにいる。だがあつちはこちらに気付いていない。というか小屋の前に着いた。なんとかしろ!】

え!?! マジで!?!

やり取りをして直ぐ、ギィと小屋の扉が開かれた。

【来た!】

!!

俺は毛布を強く握り締めて頭まで被ると身体を強張らせる。

てか臭っ!?!

「おや? 先客が居たようだな?」

俺の声だ間違いない。ドッペルゲンガーが来やがった! 流石俺! しつこいよ!

「おや、どちら様でやんす」

声色を変えて話掛ける。

どうやら起きていないと思っていたのか身体をビクツとさせるドッ

ペルゲンガー。

【やんすってお前、センスないな】

やっぱり異世界だな。デスとは言葉が通じないみたいだ。

「ああ、すまない。俺は……ヤマダジロウ、ジロウと呼んでくれ」

気付かれてない！ よっしや！ てかジロウって名前のセンスないな！

何故だろうか……心にぽっかり穴が空いた気分だ。

「はい、ジロウさんでやんすね。どうも私はサブロウと言いまして、しがない旅人でやんす」

ああ、何故だろう。この偽名を使った瞬間、俺の心はナイフで抉られたみたい……くっ！

「サブロウさんか、何故か貴方とは親近感が沸くな。魔術で明かりを点けられるんだが点けてもいいかな？」

不味い偽名でバレたか？ いや、アイツは馬鹿だ。気付いていない筈。なら誤魔化してやれ！

「お待ち下さいでやんす。む、娘の……五才になる、娘の、は、ハナコが今やっと眠りに着いたばかりで着けないで欲しいでやんす」

【ヤマダ、ハナコって、お前の名前と同等だな】

止めてくれ、デス……それ以上は俺の邪気眼が発動してしまう。

【ほう、邪気眼とな。今お前のスキルを調べてやる……んなもんないぞヤマダ】

これは多分、デバイスにも乗らない情報なんだ。いやこれ以上はデスには話せん。

「……そうか、なら仕方ない。娘さんを大事にしなきゃな。それと一つ聞きたい事があるんだが……」

不味ーい！ 聞きたい事ってなんだ！？ ていうか娘さんを大事に
ってまとも台詞だわ。

【まあ、よほどオツムが悪くなければいい加減気付くよな、ふむヤマダ諦めろ】

くそお！ まだ異世界ライフ満喫してねえぞ！ なら破れかぶれで飛び出すか？

「俺は人を探していてな。何処かの大陸に絶世の美男子が現れたという噂を聞いた事がないか？」

糞！ こうなったらって………え？ 気付いてない？ コイツが探してる絶世の美男子って俺の事だよな？

【いや絶世の美男子ではないがな。まあ、そこいらにいる村人Aと
いう感じだな】

もういい加減にするDEATH!

ぐああああ! 俺の右腕があああ! 静まれえ!! 静まれええ!!

【はあ……はいはい良かったな】

……………。もう何も言うまい。いや、閃いた! デス! ここから一番遠くて危険な国は何処だ!?

【まあ漆黒の大陸、デズルースだな。ってまさかお前!?】

ふふふ、ああアイツにはそのデズルースに行って貰おうか。

「どうした? 何か思い当たる噂があるのか?」

ふん、お前なんかどっかいつちまえ糞が!

「へい、そういえば旅の商人が言っていた噂があるでやんす」

「ほう、教えてもらえるかな? 勿論タダとは言わない」

食い付いてきた。しかも報酬付き。報酬ちらつかせやがって屑が!

【自分に随分な言い草だな】

もう嫌、心が、痛い……。。

「いいんでやんすか? 大した話では無いかもしれないでやんすよ」

【まあ作り話だしな】

ちよつとデス、めっ！ 静かに！

「ああ、構わんさ。さっきも言っただろう。サブロウさんには親近感がわくって、さあ教えてくれ」

へ、んじゃ有り難く頂くぜ、ダセエ名前のジロウさんよ。

【お前の名前も――】

止めて！ デス。これ以上俺を苦しめないで。

「へい、では……何でも漆黒の大陸デズルースに絶世の美男子が現れて貴族の娘さんやらエルフの娘さん、はたまたその国の王女様まで侍らせてハーレムを楽しんでいるみたいでやんす、確か商人が言っていた名前が……た、たろ？ ……んー」

「それはタロウという名前ではないか！？」

アホか！ んなハーレム俺に作れる……訳……訳。

【もういい。もういいんだヤマダ】

デスの慰めの言葉が頭に、いや心にも響く。

だが、俺は――認めない！ ええ！ 認めたまるもんですか！

くっ！ 作れるもん！ 作れるもんね！ でも三次元なんか嫌いだ

から！ 別にいいし！ 別にいらないし！

「へ、へい……確かぞうでやんずう」

何故か我慢出来ずに涙が溢れてくる。違うこれは俺の血だ！ 涙じやない！ 俺の心の血なんだ！ うう。

「そうか、どうした？ サブロウさん？ 泣いているのか？」

畜生！ バレちまうじゃねえか！

【すまん……つい楽しくてな】

これまた酷いカミングアウト受けた。

「ええ、明日がら娘をバナゴをどうやって食わしていげばいいが……うう、路頭に迷っでいまじでえ……やんず」

アブね、やんす付け忘れる所だった。てか、もうヤケクソだ。はは、バレるなこりゃ。

【ああ、不味いな。ジロウが黙り込んでいるぞ】

「サブロウさん、あんだいいぢぢおやだなあ。くっ——」

俺は生まれてこの方、こんな単純で馬鹿な奴を生まれて初めてみました。

そして、あの時の事を思い出す。チャットで知り合った可愛い女の

苦勞話に感化され——買ってしまったのだ、十萬円の壺を。まあ親の財布から抜いたが。

あの時の苦い思い出が蘇った。

「いや……あつしなんて……ぐすつ……せめてハナコには苦勞をさせたくなくて旅をしています」

よし、泣き止んだ。一気にクールダウンしたわ。

【うん、いや、うん頑張れしか言えないわ】

頑張ってる奴に頑張ってたって言っちゃ駄目なんだぞ！

「これは、俺がここに来る前に……ぐすつ……襲ってきた山賊から……頂いた金だ。これで……娘さんに上手いもんでも食わしてやってくれサブロウさん！」

おい、一応、娘寝ている設定だからな。騒ぐなよタコ。

ガチャリ、と金属が鳴る。暗くて見えねえが音からして結構入ってるんじゃないか？

【しかし、あれもしいていえば人の物じゃねえか？】
あえてスルーする。

ガチャリ、とドアが開く音が聞こえる。

うわ月明かりに照らされた俺。不細工だわあ。

……くっ、また涙が……。

「ジロウさん？ 何処へ行くでやんす？」

悲痛そうな表情を空に向けて格好つけるジロウ。

多分こっからクセエ台詞言うんだろ。

「俺には……追わなければ行けない相手が居てな……それが終わったらサブロウさん。あんたとは酒を飲み明かしたいな」

ほらクセエ。

んじゃ一応感謝しておくか。

「ありがとうございます。ジロウさん……貴方とはまた会える気がするでやんす」

まあ、絶対に会いたくないがな。お前と会うと心の傷が増える。必死に毛布で顔を包む。今バレたら洒落にならん。

「ああ、またなサブロウさん」

そう言ってジロウは勢いよくドアを閉めて去っていった。

【……最後、娘寝ているの絶対忘れてるよな？ しかもデズルースまでの行き方とか聞いてねえしジロウ】

まあ俺だし。

ジロウが置いて行った袋を持って毛布にくるまる。

「寝るのかヤマダ」

「おう」

「そうかお休み」

「おう」

その夜、俺は枕ではなく毛布を濡らして泣いたのは言うまでもない。

真夜中の乱入者（ドッペルゲンガー）（後書き）

いやなかなか携帯ながらもページを増やせるようになってきました
f（^ ^；

次はいよいよ街に行きます。いやあやっどです。

出来れば見捨てないで頂けたら幸いです（*、▽、*）

これからも頑張ります（ΦωΦ）

深緑街ラフェルの生意気女（ツンデレラ）（前書き）

ちよつと頑張つて長いを書いて見ました。携帯はやっぱりキツいで
すね（汗）

PCが欲しいです。

誤字脱字は申し訳ありません。拙い文ではありますが引き続きよろ
しく願ひします（人へωへ）

深緑街ラフェルの生意気女（ツンデレラ）

それは清々しい朝だった。携帯を開くとAM七時。ふあつ、と欠伸をして臭い毛布を放り投げて起き上がると背筋を伸ばす。

んー、いい朝。

こんなに早起したのは久しぶりだ。小学校以来だ。

「おーいデス。起きろよ」

「ん？ 朝か？」

むくりとデスは起き上がり毛布を俺に放り投げてきた。

「しまってください」

ぼふん、と見事に俺の顔に命中。酷すぎる。てか臭い。朝から二回もこの臭いを嗅ぐとはな。

ちなみに俺の毛布は涙で湿っていて今のこの酸っぱさ溢れる臭い＋半乾きの臭いで更に臭い。

とりあえず、昨日ジロウから貰ったモノを物色しますか。

俺はテーブルに給食袋程の大きさの白い袋を置くと紐を緩めて中身を確認する。

「うは、ピカピカやん」

映画で見たような金貨の山。流石に盗賊から奪っただけあって中身も豪華だ。

「おやん？」

「どうした？」

デスが怪訝そうな顔をして袋を覗き込む。

俺は見つけたのは金貨の中に一つだけ際立っている黒真珠の指輪。

それを手に取ると右手の小指にはめる。

「きいー、んまあ、デスちゃん。お勉強するぞます！」

一度やってみたかったんだ。ザマス婆の真似。これでもっと指輪をいっぱい付けて悪趣味な眼鏡掛けたら完璧だ。

「朝から何を馬鹿をやっている……て、あ？」

間の抜けた声を漏らしてデスは指輪を指差す。

「ん？ 欲しいのか？ いらんからやるぞ」

人から貰ったモノをあげるのは最低な事だかこれは俺が俺から貰ったモノだからそれには含まれないだろう。

「いらん、それ呪われてる」

「ふーん、え？」

今何て仰いました？ いやいや、流石にそんなベタな話がある訳ないですよ。

「だから呪われてる。外せないぞそれ。ちなみに中々のレアアイテムでいいスキル付いてるから外れなくても問題ないだろ」

嘘？ いいスキル付いてもなんか嫌じゃん。呪われてるって。

「……外せないの？」

うーん、と唸り腕組みをして五秒程でデスの頭に閃きの電球が瞬いた。

「小指に切り落とせば外せるぞ」

「ああ、ならいいや」

即答する。

「そうか、まあ外したくなったら何時でも手伝ってやるぜ」

残念そうな顔をするデスは絶対にSだと確信する。

俺は袋の口を絞め、担ぐ。

「……重いな」

これがお金の重みか。壺を買った以前の俺に教えてあげたい。

「なんだ、折角何だからスキル使えよ」

「スキルって？」

「ん、指輪のスキル。これ位しまえるぞ」

へえ、ちよつとアイテムボックス見てみるか。

俺はデバイスのアイテム項目をタッチして黒真珠の指輪（呪い）を更にタッチする。

すると画面に何やら説明文が表示される。何々。

《パッシブスキル…呪い》指輪が外せなくなる。

まんまやな。

《マジックスキル…異次元ボックス》

無限では無いがある程度の物を異次元にしまえる。だが、許容範囲を超えると暴走し使用者を飲み込む。

へえ、使える……いやいや使えねえよ！！

「怖えよ！ このスキル！ しかも許容範囲が曖昧過ぎる！」

「いや無限じゃないけど、馬鹿みたいに街一つ丸ごと入れようとしなければ大丈夫だぞ」

「なら使えるな。んじゃこのスキルどうやって使うんだ？」

指輪をマジマジと見つめる。

「ああ、適当に呪文つければ最悪念じればなんなもん使えるだろ。魔力を使わず使える代物だしな」

「なんだそりゃ、中々のレアアイテムじゃねえか。これは嬉しい拾い物だ」

物は試しで金の入っている袋を念じて異空間ボックスに送る。

すると一瞬にして袋が消える。

「おおっ!?!」

こりゃ凄い。俺は目をパチクリさせる。

デスが俺の腕をポンポンと叩いてきたので顔をそちらに向ける。

「なっ? んじゃさっさと行くぞ」

「ういっす」



ラフェルの街というのは深緑街ラフェルの通称だとデスに教えて貰った。

「深緑街って?」

疑問をぶつけると何でもこの大陸の名前がユーファといい、この国の名前だという。王都ユーファの次に大きな街で深緑大陸ユーファの深緑を名を貰ってつけられた名前らしい。

ちなみに俺がタガメ村だと思っていた村の名前はアサギ村と言い農業が盛んな村だったんだと。

今はタガメが盛んな村だけだね。

更にこの世界テーブルには赤、青、緑、黄、白、黒の6つの大陸がある。

俺が現在しているのは深緑のユーファ。

漆黒のデズルース。

の二つだけが他にも

蒼海のアクエラン。

紅のレッドファア。

土のグランドル。

白銀のスノーズ。

という四つの大陸があるそうだ。

そんなテーブル知識を学習しながら俺はラフェルに向かって歩いていた。

幸い、魔獣に出会す事は無く、喉が渴いてもウォシユレットで鍛えたこの【水魔術スプレット】があるので案外喉の渴きは潤せている。その道中。

ギルドに入って、ランク上げて、武器買って、奴隷になってる娘助けて、フラグ立てて——うはっ！ 夢が広がりんぐ！

等と妄想を膨らませながら歩き続けて早、一日。

夜通し歩き続けた俺達はいや俺一人だけ身体に異常を来していた。目の下に隈は出来るわ。腹は減るわ。足は痛いわ。でかなりしんどい。

てかどんだけデスは元気なの？

と思ったがこの娘、デバイスなのよね。

疲れるわけじゃない！

街が見えてきて門の所に差し当たると槍を持って構える門番A、B、的な人に先に進むのを止められてしまった。

何？ 職務質問？ 止めてよね。

「君達は何処から来たんだ？」

門番Aめ、やっぱり職務質問か。

てか、あのタガメじゃなかったアサギ村の事は触れない方が良さそうだ。厄介事はパス。俺規格外じゃないしね。

「俺、昨日、テーブルに来たばかりのプレイヤーでこっちは俺のデバイスのデス」

簡潔に答える。

「よろしくな」

と元気よくデスが挨拶をしている。

俺は腕のデバイスを見せながらすたすたと前に歩き出す。

もう無理、最初に飯。次に寝る。

「ちょっと待て！ 昨日来たばかりのプレイヤーが何故精霊を具現化出来る！ 怪しい奴だな！」

何この門番B、うぜえ。つか精霊って何よ。

ポカンと呆けた顔をして俺は門番A、B、が訝しげな顔をして俺を睨んでいる。

ああ、ムカついた。コイツらお仕置きしちやる。

「まあ待てヤマダ。私は特別製でな。別にコイツが弱かろうが強かろうが具現化できんだわ」

そう言ってデスが幽体化して消えたり幽体化を解除して出てきたりすると、門番A、B、は驚いた表情を浮かべる。

その後何でもなかったかの様に俺とデスを街の中通す門番A、B。

ちなみにあのまま俺を通さなかった場合異次元ボックスにあの二人を突っ込んでやるつもりだった。

折角たどり着いた。街の街並みも家造りも歩く多種多彩な人々も門番A、Bのせいで楽しくない。

というか謝れやボケ。

「そういうのは本人達に向かって言ってみろ」

ニヤニヤ笑みを浮かべるデス。

出来る訳ないだろう。俺臆病者だし。^{チキン}

「臆病者がよく異次元ボックスに人を突っ込もうと思ったな。やってたらあの二人死んでたぞ、お前も含めてな。つまり異次元ボックスに人は入れられない入れたら暴走するって事だ。それに他にも魔術で入り口は監視されてる問題起こせばから捕まるぜ」

成る程、だからデスは止めてくれたのね。

ありがたや、ありがたや。

とりあえずデスを拝んでおいた。

てか、異次元ボックス怖っ。

「ちなみに私が精霊だという事は教えて無かったがその事ついてに聞かないのか？」

何か長くなりそうだな。宿屋は何処だ。

「あー、いいや腹減ったし眠いしその内話してくれるんでしょ」

「……かもな」

かもな……って、まあ、いいやデスはデスだし。

その思考を読み取ったのかデスはふっ、と不敵に笑う。

俺は必死に宿屋を探す。何故だろうか。行き交う人が俺を避けて通っている気がする。

「そりゃそんだけ隈は作って目も血走ってれば人は避けてくだろ」

それは不味い。本格的に宿屋を探さなくては。

「本格的に探して無かったのか？」

「いや探してます」

カラカラと乾いた笑いを溢して「こっちだついてこい」と言うので俺は着いて行く。

するすると先に進むデスの歩みがピタリと止まり俺も足を止める。

すると目の前に【深緑亭アリア】と書かれた看板が目に入る。

すう、と空気に漂う食欲をそそる匂いが俺の鼻腔を刺激する。

やべえ、無茶苦茶腹減ったわ。

すたすたと中にも入って行くと「いらっしやいませー」と言う女性店員の元気な声が店内に響き渡る。

見た所に一階は酒場の様な感じた。丸いテーブルが15卓。バーテンドーが立つようなカウンターテーブル。そのカウンターテーブルの暖簾が掛かった厨房から緑色の長い髪を二つ結びで三つ編みにした耳の尖った制服を着た女性が姿を表した。

あれ？ 今はいらっしやいませってどうやって分かったんだ？

「入り口に魔術でセンサーが張ってあって人が入り口から入ると厨房で音がなる仕組みだ」

俺の思考を読んだデスが淡々と説明してくれる。

「成る程、ありがたやデス様。来て以来、デスにお世話になりっぱなしだ」

「おう、感謝しろよ」

「ははー」

そのやり取りをきょとんと見つめていた店員さんが「ふふ」と微笑みを浮かべる。

「あ、すいません。二人で寝泊まりいくらですか？」
俺は近づいて来る店員さんに料金を尋ねる。

リーズナブルなら嬉しいんだけどな。

【ヤマダ、金なら随分あんだろ。まあ大丈夫だ】

確かにな。

ニッコリと営業スマイルをして「御二人様一泊食事込みで銀貨二枚です」と言うので異空間ボックスから金貨を一枚取り出して店員さんに渡す。

「えーと……一泊ですか？」

困った様子で店員さんが此方を伺っている。

何？ 金貨じゃ足りんの？

【いや多すぎて困ってるんだろう。銀貨百枚で金貨一枚だ】

へえ……うえ！？ 聞いてない是よ！？

【言っていないからな聞かれもされねえしな】

ですね。

「あのお……一泊ですか？」

おお、念話に集中し過ぎてしまった。

デスといるとほぼ念話で事足りるから気がつかんかった。

「あ、んじゃ泊まれるだけ泊まります」

「あ、はい！ ありがとうございます五十泊ですね。部屋は別々に致しますか？」

と言われたのでデスに顔を向けると「一緒に構わない」と言うので一緒に部屋になった。

ちなみに部屋は二階に上がって左手の角部屋だそうだ。ラッキー。

「あのか？ すいません。今すぐ飯食べれます？」

「日替わりランチで良ければ大丈夫ですよ」

と言うのでデスとテーブル席に座った。

「デスってご飯食べれんの？」

素朴な疑問だった。だってデバイス、もとい精霊はご飯食べるのか分からんし。

「おう！ 食うぜ！」

男顔負けな程男言葉なデス様。格好いいっす。

厨房から流れてくる素晴らしい香りで俺は悩殺されそうになる。二日食べてないんですもの。しばらくすると「お待たせしましたー」と先程店員さんが日替わりランチなるハンバーグ定食を持ってきてくれた。

しかし、何故かデスにはお子様ランチだ。

いや何も言うまい。

怖いから。

デスは顔をプルプルさせながら俺と同じのに返ると店員さん呼びつける。とても困った顔をして

「もう作ってしまったのでごめんなさい！ 次からは同じのにします」

と店員さんは何度頭を下げていた。

しかし、デスは諦めない。今度は俺に

「ヤマダあ、分かるよな」と仰られるのでしようがなく俺がデスとご飯を交換する羽目になった。

食事が終わるまで終始上機嫌でその間、デスはしきりに「旨いか？
ヤマダ？ お子様ランチ旨いか？ ぷ」と笑うのだ。

「……旨いよ」

俺はこう返すしか他にない。だって旨いもん。でも、お子様ランチ
じゃもの足りんよ……。

「店員さーんお風呂入れますかあ？」

食事を終え、俺は店員さん聞いてみた。
ちなみにデスは既に部屋で休んでいる。

「はい、私の事はアリサと呼んで下さい。呼ばれ慣れなくて」

舌を出してえへへ、と笑う店員——アリサさん。以前の俺ならうは、
やべ可愛いとか言っているんだろうが俺は以前の俺じゃない。

もうあんな馬鹿ジロウと同じは嫌だ。それに可愛い女は怖い。壺を思い出
す。

「分かりましたアリサさん。俺は……」

ヤマダタロウ、タロウと呼んで下さい。そう言おうと思ったが凄
いデジャブを感じる。
なので、

「アリサさんの好きに呼んで下さい」

とだけ告げた。

危ねえ、馬鹿と同じ自己紹介するところだったぜ。

「それじゃお連れ様がヤマダと仰られていたのでヤマダさんで」

ほう、無難だ。良かった。

「大浴場はその通路をずっと先に行った場所ありますので」

「ういっす」

俺は大浴場へ向かわ………なかった。服が汚いもの。二日も着ている。俺はニートだが服をきちんと変える綺麗好きなニートだ。テヘ。

おーいデス。

念話でデス呼び出す。

【なんだヤマダ？】

風呂に入るから服欲しいんだけど案内してくれない？

【そうか分かった。嫌だ】

え？ 何どっち？

【だから内容は分かった。だが嫌だ。てめえの足で買いに行け】

りよ、了解ボス。

俺は一人とぼとぼ深緑亭を後にした。

まさかデスが「把握した。だが断る」と言う高等テクニックを使うとは思わなかった。

服屋を探して街を探索中、色んなフラグが立ちそうなイベントをスルーしました。

DQNに絡まれてる人。

助けて欲しそうにこちらを見つめている。

論外！ 助けるわけない。怖い。危ない。無理ゲー。

坊っちゃん、と叫びながら街中を歩くセバスちゃん的な執事爺。多分腕白な貴族の御曹司を探してるんだろう。手伝って欲しそうな目でこちらを見つめていたが目なんて合わせねえよ！

勿論スルー！ だって坊っちゃんだぜ。はっ、笑える。

等々、テンプレート的な物は見掛けたが事ごとくスルー、だって俺弱いんだもん。

幸い、道端にたむろしているDQNには絡まれませんでした。それは全力で遠回りしたし。

フラグウウブレイク！！

これで何にも巻き込まれずに安泰に過ごせるわ。

と思っていると服屋らしき店舗を発見。近づくとうインドウガラスの前に張り付いて離れない長いボサボサの金髪をツインテールに纏めた小汚ないドレス擬きを着た耳の尖った少女が物欲しそうに綺麗な深紅のドレスを見つめていた。

やべこいつ！ 厄介なフラグ臭がしやがるぜ！

こいつもスルーだ！

無視して店に入ろうとすると真横から声。

「ちょっと不細工お待ちなさい」

カチン、と来たね。それを俺に言っているのは俺だけだ！
だが、ぐっと我慢。

フラグブレイクだ！

無視して店内に入る。

「いらっしゃいませー」

店員は気さくなおばちゃんのような人だった。

「あの男性物の下着と服を適当に見繕って下さい」そう言って金貨を一枚レジの横に置く。

その瞬間、おばちゃん店員は金貨と俺を交互に見て一瞬固まる。

そして、

「畏まりました！ 少々お待ち下さい！」

営業トークを大声で叫ぶと世話もなく動き始めた。

俺は壁にもたれながら外を見る。

すると、あの小汚ない少女が恨めしそうにこちらを睨み付けている。

やべ、これ以上見たらヤバイ。フラグが立つちまう。
無視して視線を反らすと風呂の事を考える。

そう言えばデスっていつも同じ服だよな。お世話になってるし買っ
ていくか。

「すみません」

「はい！ もう少々お待ち下さい生憎一人でして……」

分かるよ。でも何をそんなに急いでんだおばちゃん。俺急げなんて
頼んでないけど。

「ああ、急がなくていいですよ。後、子……女性物も良いですか？
お世話になってる連れにプレゼントしたいので」

危ない危ない、禁句を言う所だった。

俺は安堵し胸を撫で下ろした。

「はい！ 分かりました！ 少々お待ち下さい！」

おばちゃんは急がなくていいと言うのにもっと世話しなく動き出し
た。もうワケわからない。

一時間後、店の服が殆ど袋に詰められた。しかもレジ前にズラツと
並んでいる。この袋の山どうすんだ？ 女物の服が入っている袋は
綺麗で可愛らしくラッピングされている
このラッピング、デス怒んないかな。

実に不安である。

「本日閉店セールでして……これ全部で金貨一枚です！」

息も絶え絶えでおばちゃんと言う。

あ、いや金貨一枚分、欲しいんじゃないかって……うわーすげえ言いにくい。

「お運び致しますか??」

まあ、確かに一人じゃもてないわな。だが俺には秘密兵器がある！

「大丈夫です。ラッピングまでありがとうございます」

「いや、でも……」

おばちゃんは心配そうに俺を見ている。

俺は頭を下げて異次元ボックスの中に服の詰まった袋を全て収納した。

一瞬にして、袋が消えるとおばちゃんは目をまん丸くさせて驚いていた。

ちょっと気分が良い。

「驚きました！ 凄いですね！」

まあな、でも呪われるがな。

「ありがとうございますあ！」

俺は足早に店を出た。これでようやく風呂に入れる！

足取りも軽く深緑亭に向かう。結構歩いたし道も覚えたから迷いはしないだろう。

「ちょっと不細工お待ちなさい！」

ふんふーん。鼻歌混じりで俺は歩いていく。

「お待ちなさいといっておりますわ！」

あーあー聞こえない。

しかも前に回り込んで来やがったなこいつ。
だがスルーだ。

「お待ちになって!!！」

「ぐあ!?!」

抱き着いて来やがった! しかもくせえぞこいつ!!

「離せ!!！」

休憩小屋にあった毛布の何倍も臭う! なんだこの頭皮と生ゴミの臭いがミックスされてる臭いは!?! それに酸っぱさが目に染みるう!

「嫌ですわ!! 私のお話を聞きなさい!!」

なんつう強引なフラグだ! 無理矢理立たせるのは無しだろ!

「はん、こっちも嫌だね! くせえ小汚ねえ女の話なんか聞かか!!」

「なっ！？　なんて失礼なのですか！？　それが淑女に対する口の聞き方ですよ！？」

なんだコイツ！　自分の事棚に上げやがって！

「てめえだってな！　最初から人を不細工とか！　そんな相手が淑女だあ！？　とんだお笑い話だ！　聞く気にならねえ！」

「私貴方わたくしにそんな事言つたつもりはありませんの！　貴方だって自分の事じゃないと思つて無視してたんじゃなくて！？」

ああいえばこう言うだ。
めんどくせえ！　コイツの狙いは分かつてるあの服だろ！

いい加減鼻が曲がる。

だが、店の物が大概袋に入っている筈だがあのドレスも入っているか？

いや、入っている筈だ。じゃなきゃこの女がついてくるはずかない。

俺は異空間ボックスに綺麗な深紅のドレスをイメージして取り出す。
おお、出てきた。

「お前の狙いはこれだろ！　お前にやるから俺から離れろ！　後、俺に関わるな！」

「え？　あ」

ドレスを見た瞬間に俺を放した少女の腕に無理矢理ドレスを掴ませて俺は足早に来た道を走る。

糞！ 歩きまくって足も痛てえのに！

悪態を吐きながら深緑亭へと向かう。

絶対めんどくせえフラグ立ったと思いつつながら。

俺が立っていたいフラグは奴隷の美少女だけだ！ それでご主人様って言われたんだよお！

俺は走るのを止めると項垂れながらゆっくりと歩き続けた。

深緑街ラフェルの生意気女（ツンデレラ）（後書き）

という感じで次回です。 次回はギルドとか出したいな。

PV3000超え

ユニーク550超え

お気に入り10件

（；つД（）ゴシゴシ

見間違いでしょうか（トート） 感動です。

引き続き暖かい目で作者とこの作品を見て頂けると嬉しいです（＊
▽、＊）

生意気女（ツンデレ）の思惑（前書き）

すいません＞（――；）＜馬鹿な作者はまたやってしまいました。
ギルドとか出すと言ってたのですが……今回は出ません＞（――；
）＜

次回です！次回は必ずギルドに行きます！依頼を受けます！

PV4790

ユニーク713

お気に入り14件

もう何が起きたのか（――） 嬉しすぎます（――）

拙い文ではありますが宜しくお願いいたします＞（――）＜

生意気女（ツンデレラ）の思惑

街の外れに立つ草臥れた大きな施設のような建物。その建物はラフエル孤児院と呼ばれ、最低限の生活を送るだけの家具が子供部屋と呼ばれる大部屋に置かれている。その子供部屋に金髪ツインテールのエルフの少女と、人間の少年が一人ハンガーに掛けられた綺麗な深紅のドレスを見つめている。

他の孤児達は外に遊びに行っていた。孤児の中でも歳が十を超え、働ける年齢になった子供達は経営が芳しくない孤児院の為に働きに出ている。

この孤児院の院長を除けば今はエルフの少女と人間の子供しかない。

エルフの少女は働きに出る年齢ではあるが今日は仕事が休日で人間の子供はまだ働く年齢ではない。

「スフィお姉ちゃん綺麗なドレスだね」

ハンガーに掛けられているドレスを見つめる少年の目は輝いていた。

「ええ、そうですわね。それはともかく私の事はスフィ御姉様とお呼びなさいと何度も――」

少年に自分の呼び方を正す、スフィと呼ばれる少女は以前から一つの計画を立てている。

それは、この貧しい生活を唯一抜け出す事が出来る玉の輿。その為には綺麗になる必要があった。精一杯可愛く見えるようにボ

サボサの髪の毛を二つに結んだ。
その為に普段使う言葉遣いも変えた。
経営が成り立たなくなりそうな孤児院にお金を入れ、ほんの僅か貰えるお小遣いを懸命にお金を貯めた。
そして、見栄えを良くする為に綺麗な服が必要だった。そして、スフィは先程あった事を思い出していた。



唯一、この街で一番安いながらも見栄えの良いドレスを売っている店が本日閉店と言う事でウインドウに飾られている深紅のドレスを物欲しげに見つめる事しか出来なかった。
貯めたお金では飾られているドレスの値段には全然足りなかったのだ。

そこに間抜けを顔にぶら下げたような不細工な男がその店に入って行こうとするのが見える。

（この男、馬鹿そうだから騙せばお金くれそうですわ）
いけない事だと分かっているながらもどうしてもドレスが欲しかったスフィは声を掛けるが無視された。

（私を無視ですって！？ なんなんですよ！？ あの不細工！！）
恨めしげに男を睨み付ける。

（え！？ あの不細工プレイヤーなのですか！？）

一瞬、左手首に埋め込まれた機械を目にしてふと院長から言われた事を思い出す。

プレイヤーはこのテーブルとは違う世界からやって来た人種でその力は強く、強力な魔力を持ち、高額な報酬の危険な依頼を好み、女を侍らせるのが好きで危険だから近付くな、と。

この歪んだ情報は院長の実際の愛娘がプレイヤーに惚れてしまい、孤児院から離れてしまった院長の私怨から生まれているとはつゆしらず、スフィは父親代わりのその情報を鵜呑みにしていた。

（なら、あの不細工も高額収入！？……でも全然強そうに見えるせんわ）

それもその筈、スフィが不細工と呼ぶ男——山田太郎はテーブルに来たプレイヤーの中でも最弱、むしろソフィより弱いと言っても過言ではない。

それを知らずに男と店員の動作を食い入るように見つめる。

男が何かをレジに置いた途端に店員は驚いた様子で、置かれた物と男の顔を見比べると勢い良く店内を駆け回り手当たり次第に服を袋に詰め始める。

（なっ！？）

ほんの一時間ばかりの間に店の売り物を袋に詰めた店員は満足げな表情を浮かべ、男を見ると、男は店員にお辞儀をする。スフィが欲しかった深紅のドレスもあの袋の中だ。

（この店の服を買い占めましたの！？）

そして、次の瞬間、男がその服が詰められた大量の袋に手を翳すと一瞬にしてその場から消える。

「凄いです！」

という店員の声が外まで漏れてきた。多分、あの男が何かを使って大量の袋を何処かにしまったのだろう。

（間違いないですわ！ この不細工！ 高額収入プレイヤーですわ！）

見たこともない力を使った男をスフィは強いと勘違いしてしまっていた。

そして、スフィは思考を走らせる。

男は見るからに人間。そして馬鹿で騙し易そうだ。人間とエルフの寿命は違う。エルフは何百年も生きるが人間はエルフの寿命が来る前に死ぬ。この男を惚れさせて騙し、肌には一切触れせず結婚して馬車馬の様に働かせ、お金を溜め込み、尻に敷いて財布の紐を握る。本妻はスフィ。その他の女をあてがい遺言書に財産は全てスフィに託すと書かせて、五、六十年我慢すれば――。

（――大金持ちですわ！）

ニヤリ、と賤しい笑みを溢すスフィの瞳には大量の金貨が見えるよ

うな気がする。

男が店を出ようしている。

（この鴨——逃がしませんわよ！）

声を掛けるが無視されてしまった。負けじと声を掛けるも

（こうなったら……）

スフィは意を決して男に抱き着いた。

だが、男は離せと暴れ、しまいにはスフィを汚い、臭いと罵倒する。汚いのは分かっていたが臭いなんて言われた事がなかったスフィは頭に血が昇る。

（臭いですってえ……ふざけるんじゃないありませんわ！）

スフィは負けじと反論する。男は面倒そうな表情をしてスフィの狙いは分かっていると叫ぶ。

（え？ バレたですって？ いやまさかそんな筈……）

だが、相手に触れただけで相手の思惑が分かるスキルを持っているプレイヤーがいるという話を聞いた事がある。

この男にもそれがあったのか、と思わず抱き締めていた腕を離すと何処から取り出したのか乱暴に深紅のドレスをスフィに掴ませると男は何かを叫んで走り出した。

（え、これは……）

それは間違いなくスフィの欲しかった深紅のドレスである。どうやらあの男にはそういったスキルは持っていなかったようだ、と安堵する。

そして振り返るがもうその時には既に男の姿はなかった。



「ぼうっとしてどうしたの？ スフィ御姉様？」

少年が心配そうにスフィを見つめている。

（どうやら少しぼうっとしてたみたいですね）

「なんでもないですよ……ねえ？ 私って臭いかしら？」

そうスフィが少年に尋ねるとニツコリと笑って首を横に振る。

「ううん！ スフィ御姉様はいい匂いだよ！」

その言葉にほっ、と胸を撫で下ろすスフィであったが少年もスフィも自分達の匂いに慣れてしまい鼻が馬鹿になっている事に気付いていない。

もう何年もお風呂に入っていない。更に仕事は街の清掃やドブさらいの仕事をしているので凄まじい程凶悪な臭いを放っているスフィである。

なら、何故あの男は私を臭いと言っていたのか？

（まさか……照れていた？）

スフィにはこの孤児院で一番可愛い自信があった。周りの子供達には綺麗と言われ同年代の孤児達には好きだと告白を受けた事もある。

（そういえば、あの時も……）

確かに男の青い顔は抱き着いた瞬間、真っ赤になっていた気が、なら照れていたんだ。と、スフィはそう納得する。

だが、あれは山田が寝ていない為には顔が真っ赤になっていて、余りの臭ささに息を止めて真っ赤になっていたのだ。そんな事だとはつゆしらず、スフィは微笑む。

（……あの不細工は私に気がある）

たまのこし
勝利を確信したからだ。

「ふふふ」

「どうして笑ってるのスフィ御姉様？」

「なんでもありませんわ」

「そういえばスフィ御姉様？ この綺麗なドレス誰から貰ったの？」

「それは未来の旦那様（金づる）からですよ」

「ええー！ スフィ御姉様結婚するのお！？」

「ええ……必ず」

（絶対に……逃がしませんわ）

スフィが結婚する話題は孤児院中に一気に広まった。

山田はスフィとスフィが好きな同年代の孤児達から狙われる事になるのは今は知らない。



一方その頃山田は――。

ここは深緑亭の大浴場。

誰も居ない大浴場のタイルを一人走る山田の姿がそこにあった。

「I、CAN、FRYイイ！！」

勢い良く、大きな浴槽に飛び込み、一人大浴場を満喫していた。

この後、山田はとある事で眠れなくなる事態に陥る事に気が付いていなかった。

生意気女（ツンデレラ）の思惑（後書き）

はい、ただ山田さんを生意気女が狙う理由を書きたかったのです。これからどうやってツンデレラになるか暖かい目で見ていただけたら嬉しいです（トート）

次回！ 山田、初めての依頼おっかいです！（確実）

優しい読者様、これからも拙い文ではありますがお付き合いしていただけたら幸いです。

追伸、山田さんとデスの書き方は以前の書き方を。それ以外は今回の書き方をします＞（――；）＜

混乱なさる方もいらっしゃると思いますが全て作者の力不足です＞（――；）＜申し訳ありません

山田、初めての試験依頼（おつかい）前編（前書き）

何とか書けました。ちょっと長くなりそうなので……半端ではありませんが区切ります。

因みに、スフィは15、6歳の設定です（▽₁；）

これはスフィの歳については今後書きますが一重に、一重に作者の力不足であります＞（――；）＜

拙い文ではありますが引き続き暖かい目で見てやって下さいませ＞（――；）＜

山田、初めての試験依頼（おつかい）前編

今——俺はこのうえない窮地に立たされていた。

ここは俺達が寝泊まりをする事になった深緑亭。

まず入り口から右手にある階段を上がり左に曲がる。

そのまま奥まで移動して突き当たりの部屋が俺達に儲けられた部屋だ。

ドアを開けるとまず目に入るのは左右両側、壁際に設置されたベッドが二つ。

それ以外は小さなこじんまりとした四角いテーブルと外の風景が一望、とまでは行かないが街並みを覗ける程度の窓。勿論左手のベッド近くの壁際に窓がある訳だがその左手のベッドに暇そうに胡座で座る長い白髪、真っ白なワンピースを身に纏ったデバイス事、デスにプレゼントした服が原因でこの窮地に陥る事になったのだ。



二日ぶりの風呂を堪能した俺はホクホク顔で部屋に訪れた。

ベッドの上、口を大きく開けて暇そうに胡座で座るデスに、俺は服を買って来た事を告げる。

余談ではあるが俺が今着ている服は閉店セールだと言う洋服店から買ってきた物で黒のローブ——否、俺命名、魔術師のローブである。ちなみに下着はボクサーパンツなのだが異世界にまさかボクサーパンツがあるなんて感動した！

俺はトランクス派でもブリーフ派でもなくボクサーパンツ派である。

風呂に入る前の服は異次元ボックスに突っ込んだ。

だって洗濯した事ないんだもん。

ほんの、そうほんの塵程ではあるがママンのありがたみを感じた。

「私の分の服を買ってきた？ ふーん、まあヤマダにしちゃ殊勝な考えだな。まあ見せてみるや」

不機嫌そうな口調で顔をしかめるデスの口元がニヤついていたのを俺は見逃さなかった。

俺は異次元ボックスから綺麗で可愛いラッピングの袋だけを部屋に出す。

「これ全部デスのだから」
そう言ってデスの表情を伺う。

「私はこんな可愛いラッピング好きじゃねえが、まあいい」

目は気だるそうだが、頬が緩んでいるデスの顔を見て、俺は安堵する。

どうやらこのラッピングでも怒らないようだ。

「そうだ、明日ギルドに行きたいんだけど案内頼めるかな？」

上機嫌で袋を見つめながら大きく頷くデスを見てから俺はベッドに潜り込む。

ひやっとしたベッドに入る瞬間の冷たさが心地良い。背中に広がる

柔らかな感触。

小屋では雑魚寝だったからこのベッドの感触が堪らない。デスのがさがさと袋を漁る音のBGMを聞きながら俺は訪れた睡魔に身を委ねてゆっくりとその意識を手放した。

——筈だった。何かが地を這うような低いドスの聞いた声が部屋に響き渡る。

「ヤアアアアマアアアアダアアアアアアッ」

ゾクリと背筋に走る悪寒！一気にその何が地を這うような声を察し逃げるように睡魔が去っていき俺は瞼を勢い良く開いた。

うえっ！？

起き上がりベッドに正座。デスの表情を見ると、顔に青筋を立てている。どうやら大層お怒りのご様子。一瞬、意識を手放した間に何があった！？

「イエス！ マム！」

とりあえずこれ以上機嫌を損ねるのは宜しくないと判断！俺は正座のままビシッと右腕曲げ胸の前に持っていく。

……怖過ぎる。

デスのぎらついた獣のような睨みとその背後に見える負のオーラが俺を萎縮させる。

まさに蛇に睨まれた蛙が如し俺。

「これは……なんだああ!？」

デスが袋から乱暴に取り出し前に突き出すようにしてみせたのはピンクのニットワンピ。

「ピ、ピンクのニットワンピであります! マム!」
まさか色が気に食わないのかなのか?

この部屋の温度は快適だ。だが、何故だろうこの頬を伝う嫌な汗は……。

「色? んな訳ねえよ。少し考えてみい」

ひょいっとデスの手から俺に向かってニットワンピを投げ放たれる。それは綺麗に放物線を描いて俺の膝の上へ。

この服を見ろと言う事か。

「し、失礼します! マム!」

俺は右腕を下ろすとニットワンピを手に取りマジマジと見つめる。表、裏、服の内部。全て見たが壊れている等言う現象は見られず、綺麗な新品のニットワンピである。

なら何故? サイズでも……あ?

この服は……成人女性用。という事は——この袋の中身は全て——成人女性用——だと言う事か……デスは幼じ——はっ!? いかん! ゲフン、ゲフン体型——。

あわわわ、全部、着れないではないか。

「……気が付いたかあヤマダあ」

何故だ! 何故だ! 何故だ! 何故こんな単純な事に気が付かなかった!

俺は大変な間違いを犯した! こんな事になるなら店員のおぼちゃんなんかに見繕って貰うんじゃないか! なかった!

「イ、イエス! マム! しかしながらこれは店員さんに選んで頂いた物であります!」

ぴくり、と眉を一度動かし「ああ!？」と吠えるデスの表情はまさに鬼のようである。

ひいっ!?

「だがなああ、ヤマダアアアアおめえが買う前に確認すりやあいい話じゃねえかあん!？」

正論だ。ああ、昔ママンに言われた事があった。

『人に贈り物をする時ちゃんと自分で買わなきゃ駄目よ? 太郎』

その言葉が脳裏に蘇ってきた。まさにママンの言う通りである。こんな事になるなら何故! あの時の俺はこんな重要な話を鼻をほじくりながら適当に聞き流してしまったんだ! 後悔の念に苛まれる。

「そ、その……通りで、あります! マム!」

「なら覚悟は出来てる、よなあああああ！！」

ひいひい！ 止めて！！

「大丈夫だアアアア、安心しろおお。テメエが私の為に買ってきたと言うのは考慮してやっからよおお！！」

「後生、後生ですから堪忍してください！！！」

俺は必死に土下座をして例の、つまり電気を流すのだけは止めて欲しいとせがむ。

だが、デスからの返答ない。
ならばもう一度謝るまでだ！

「お願いしま——ギャアアアアア！！！」

不意打ちだ。

もう感じたくないと思ったあの痛みが全身を走る！

俺はのたうち周りベッドから床に頭からダイブした！

三秒程、経ってから、パチン、とデスが指を鳴らして痛みが引いていった。

「はあ、はあ……はあ」

以前より時間が短い。どうやら本当に考慮してくれたようだ。

まだ身体は震えているが起き上がり、デスを見るとニヤリ、と卑しい笑みを浮かべているのが目に飛び込んできた。

「まあ痛いのはこれ位にしてやる」

た、助かったあ……。

「だが、買ってきた服全部お前が着て見せろ」

「え？」

マジスカ？

「当たり前だ！ 嫌ならもう一度――」

「着ます！ ぜひ着させて下さい！」

間髪入れずに答えた俺に「まずはそのニットワンピからだ」とデスからの指示が飛ぶ。

俺はなくなり、魔術師のローブを脱いでニットワンピを着始める。

そのデス主催の俺着せ替えショーは案外早く終わったが更に罰として、脱ぎ散らかされた服を綺麗に折り畳んで袋に詰め直すという作業を終え、異次元ボックスに袋を片付け終えたのが既に朝方。

携帯電話を取り出して時間を見るともうAM六時三十分であった。

翌朝、俺の頭をデスが小突くという過激な起こし方で目を覚ました。

「うら行くぜ」

目が凄まじくショボショボする。窓から差し込む朝日が目に滲みる。携帯電話で時間を確認すると現在AM七時。

三十分しか寝てねえ。でも起きなければ、デスの機嫌を損ねて大変な事になるかもしれん。

身体はまだだるいが、むくり、とベッドから起き上がり起床。

現在、俺の服装は魔術師のローブ。

もうあんなピチピチする服は着たくない。三十分しか寝ていないと
いうのに夢も見た。デスが女性服を持って追い掛けてくる夢だ。

トラウマだわ。

そんな事を思っていると腹の虫が飯を食わせろと鳴く。

「……デス、飯は食べてくか？」

「当たり前だ。さっさと下に降りるぞ」

俺は部屋を出るデスの後続いた。

一階に降りると昨日とは違って変わって、ちらほらとテーブルに座っている人の姿が目に入る。俺達は空いているテーブルを見つけて

椅子に座る。

厨房からどこかそわそわした雰囲気を感じさせるウェイトレス——
アリサさんが姿を見せた。手に持つおぼんの上には美味しそうな匂
いを放つベーコンエッグトーストと何なのかは分からないが湯気を
立てるスープ。

「おはようございます」

こちらに気付いて挨拶をしたアリサさんはおぼんの上の料理を提供
し終わると俺達が座るテーブルの近くまできて「ちよつと食材があ
まり手に入らなくて……申し訳ないんですが、同じのでもいいです
か？」と聞いてきたので「大丈夫」とだけ俺は答える。

デスは入念に俺と同じのにしろ、と注文をつけていた。

「大丈夫ですよ」

アリサさんはどこかきこちない笑顔を浮かべて厨房に戻っていった。

デスの注文がしつこ過ぎたか？

【馬鹿野郎、んな事あるか。多分、何かあったんじゃないかねえか？】

ふーん。まあ、何かあったとしても俺には興味ないけどね。

しばらくぼうつと、していると料理がアリサさんの手により運ばれ
てきたのでそれを口に運ぶ。

うめえ……。

デスも俺と同じ物で上機嫌のようだった。

食事を終わると深緑亭を後にしてギルドへと足を運ぶ。向かう途中、w k t kしているとその思考を読んだデスがギルドについて説明をしてくれた。

ギルドとラウンダーという二つの組織がこのテーブルにはあるとの事。

ギルドはプレイヤー。

ラウンダーはノンプレイヤーの冒険者が所属していると言う。

依頼を住人からの受けて仕事をこなす物だ。基本的には二つとも所属する者が違うだけで同じものだと言う。

ギルド、ラウンダー共にランク制でA〜Fまでのランクがある。それに細かく、例をあげるとFランクにも更に区別があると言う。

Fランクの一番下から白、赤、青、紫、黒、金と文字の色が変わるという。つまりFからDランクに上げる場合はFの金までランクをあげて更にランクアップ試験依頼を受けなければいけない。

面倒くせえ……自慢じゃないが俺！ 運転免許取るのに七回程落ちてる是！ ふひ。

【因みにステータスのランクも色分けされているぞ。後、ヤマダの魔力、色が赤に上がってるぞ】

何だって!?

まさかのレベルアップ通達に直ぐ様、デバイスに触れて、ステータ

スを確認する。

確かに魔力だけFの文字が赤に変わってる。

キタコレ！

多分、ウォシュレットやアイスニードル使ってたから魔力が成長したのか……感動……。

ビバー！！ ウォシュレット！！

【まあ、その辺の子供よりランク低いがな】

止めてよ……もう苛めないで。

更にデスの説明は続く。

ギルドとラウンダーになるには共に試験クエスト依頼を受けて、合格しなければならぬようだ。

こちらは何度でも受けられるという。

合格した後、ギルドはギルドカードをデバイスに項目追加するインストールだけで終わるらしいがラウンダーはラウンカードという物を銀貨一枚で作らなければいけないという。

それが身分証にもなる。

更にプレイヤーの場合は住所が無い為に登録した国がその人の住所になる。つまり俺ならラフェルが出身地になる。

【他に知りたい事は？】

出身地って、最初に聞かれた意味あんの？ 聞かれて、俺日本って答えたやつ。

【あれはステータスの出身地でギルドカードの出身地はまだ未定になっているから登録した場所が出身地になるんだ。ギルドカードとステータスの出身地は別物だ】

へえ、免許証と同じか。

本籍、日本で住所がラフェルみたいな。

【メンキョシヨ？ メンキョシヨが、なんなのか分からんがそんな所だ】

了解。後、宿舍とかあんの？ ギルドとかラウンダー用の？

【あるぞ、だがヤマダは金があるからいいじゃねえか別に】

確かにな。まさに金を恵んでくれたドツペルゲンガー（ジロウ）様々である。

【ここだ】

目の前の建物を指差してデスが歩みを止める。

「……へえ、ここがギルドか」

山田、初めての試験依頼（おつかい）前編（後書き）

P V 6 5 2 2 ……。

ユニーク 8 9 2 ……。

お気に入り 1 6 件 ……。

（ ω 。 ） クワ

夢を見ているのでしょうか？ （ トー トー ）

本当にありがとうございます。

何とか合間を見つけて書きました f （ ∇₁ ； ）

今後とも宜しくお願いいたします（＊、 ∇、 ＊）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2583q/>

異世界に来てしまった訳だが

2011年1月26日08時25分発行